

文部科学省委託調査研究事業

平成 29 年度

教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業

— 新たな教育課題の必修化のための研究事業 —

報告書

淑徳大学

本報告書は、文部科学省の委託調査研究事業として、淑徳大学が実施した、平成 29 年度「教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業」の成果を取りまとめたものです。

したがって、本報告書の複製、転載、引用等には文部科学省の承認手続きが必要です。

目 次

はじめに

第1章 事業の概要

第2章 理論と実践の往還を目指した学校インターンシップ

2.1 淑徳大学教育学部がめざしている教師像とは

2.2 大学4年間で身に付けたい実践的指導力とは

2.3 淑徳教師養成塾とは

2.4 学校インターンシップの基本的な考え方

2.5 学校インターンシップを支える組織と情報共有

第3章 学校インターンシップの実施内容のあり方

3.1 理論と実践の往還を目指した学校現場実習の基本的な考え方

3.2 学校インターンシップのカリキュラム

第4章 学校インターンシップと教育実習との役割分担

4.1 学校インターンシップと教育実習の目標

4.2 学校インターンシップと教育実習を通して期待できる主な成果

第5章 大学による学生に対する事前及び事後の指導

5.1 事前・事後指導の実際

5.2 受け入れ校の負担軽減として学校インターンシップ用ルーブリックの開発

第6章 学生側と受け入れ校側のニーズやメリットの把握と情報提供のあり方

6.1 小学校・教育委員会・大学間連携の現状と課題

6.2 小学校・教育委員会・大学間連携の試み

6.3 小学校・教育委員会・大学間連携の立場から見た学校インターンシップのニーズやメリット

6.4 小学校・教育委員会・大学間の情報提供、情報共有化のあり方

おわりに

資料



研究主題

教職課程に必修科目として位置づけるための

学校インターンシップのあり方

はじめに

今、大学の教員養成課程においては、豊かな人間性と共に、理論と実践を融合させる能力、すなわち大学で学修した専門的知識・技術・幅広い教養を、学校現場で実際に機能する能力にまで高めることの必要性が求められている。こうした学修で重要な課題は、学生一人一人が学校現場での体験だけで終わらせてはいけない。有意義な学校現場での体験を、大学で学ぶ理論と融合させて質の高い実践的指導力にまで高めていくための方略を教職課程に位置づけていくことが必要である。

これまで行われてきた既存の教育実習だけでは、理論と実践を融合させる能力や教師の仕事を理解し、様々な児童に対して自信をもって指導できる力を身に付けていくことは難しい。それを互いに補い合う役割として学校インターンシップを位置づけていくことが有効的である。学校インターンシップでは、長期にわたって学校や教師、児童とかかわり、様々な教育活動を経験することで、既存の教育実習と相まって、初等教育教員の養成段階における理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成ができるものという考えに至った。

こども教育学科の学生が教職課程を通して実践的指導力の基礎を身に付けるために、本学部が数年来にわたって実践してきた実習について、4週間の教育実習で身に付けられるものと、学校ボランティア等で身に付けられるものとを洗い出し、効果的・効率的な実習のあり方の具現化を検討する。特に、ここでは、以下の点に留意して検討を進める。

○これまでの教育実習と相補関係にある学校現場実習での実践的研究で効果があったことだけを整理するのではなく、どのような課題があって、どのように乗り越えたかなど。

○1年次から実施してきた学校現場で実習、学校ボランティア、教育実習などについて、それぞれの役割と、どんな効果があるのかなど。

○教育委員会との連携については、教育委員会や学生へのニーズやメリットの情報提供のあり方について、その仕組みづくりに対して、どのように取り組んできたかなど。

○大学生になったばかりの1年次生を小学校現場に出すときの事前・事後指導の工夫
以下では、上記のような留意点について、長期間の学校インターンシップを本学部独自の必修科目として位置付けていくためには、どのような問題点があり、それに対応するために、どのような工夫をしていくのかについてももう少し具体的に述べる。

(1) 学校インターンシップを受け入れる小学校等の理解を得るために

教育実習ではない学校インターンシップを受け入れてもらうためには、教育委員会や小学校の校長等に対して理解を図っていくことが課題である。

小学校と大学が密接な連携を図り、学校インターンシップが学生と大学だけにメリットがあるものではないことの理解や児童の活動時の安全確保や授業中の児童への個別対応等に学生が関わることで小学校の教育効果を高めることが期待できることの理解を得るような工夫をする。

(2) 学生に対する受入れ校の指導や評価への負担軽減の工夫

教育実習では、実習中の指導や評価は、実習受け入れ校の指導教諭が行い、大きな負担となっている場合が多い。学校インターンシップでは、その点に関する受け入れ校の負担を軽減することが課題である。

受入れ校の負担軽減の工夫として、実習中の学生の評価の簡素化を工夫する。また、実習中の指導は、基本的に大学側が責任をもって行うような工夫をする。さらに、教員・保育士養成支援センターのスタッフの実習のサポート体制を工夫する。

(3) 事前・事後指導、実習中の指導の工夫

学校インターンシップを通して、小学校教員に必要な実践的指導力の基礎を身に付けるためには、理論と関連づけて実習経験をいかに振り返らせるかが課題である。

学生に学校インターンシップを通して、目標の明確化や実習体験を振り返る「省察」の指導の工夫をする。

(4) 学校インターンシップの実施時期の工夫

学校インターンシップは、必修科目であっても大学の通常授業の合間や授業を欠席して小学校へ出向いて実習を行うというわけにはいかない。また、講義時期と重なると、二重履修となるなど、実習のための時間をどのように確保するのが課題である。

実習先の小学校と大学への通学時間や小学校現場での実習を考えると、学校インターンシップの実施時期は、講義時期と重ならないような実習時期の位置づけを検討する。

(5) 1年次の学校インターンシップを実施するための工夫

大学に入学したばかりの1年生の学生に対して小学校現場から学生の教員になるという自覚の欠如、実習態度、社会人としての基本的なマナー不足など、いろいろな指摘を受けてきた。

こうした課題に対応するために、事前指導では、TPOに関する指導を徹底したり、現在の小学校の現状について理解をさせたりするなど、きめ細かな指導内容を工夫する。

以上の5つの視点を中心に本調査研究を進めてきた。その成果を以下にまとめた。本報告が新たな教育課題の必修化のための研究にいささかとも寄与することを祈念する。

教育学部長 加藤 尚裕

第1章 推進事業の概要

1. テーマ

新たな教育課題の必修化のための研究事業

調査研究主題

教職課程に必修科目として位置づけるための学校インターンシップのあり方

2. 実施体制

職名	氏名	役割分担
教育学部長・教授	加藤 尚裕	研究総括
こども教育学科長・教授	松原 健司	学校インターンシップの実施内容
こども教育学科・教授	高橋 敏	教育委員会との連携等
〃	岡野 雅一	教育実習との役割分担・事前事後指導
養成センター・特任教員	矢島 健三	学校インターンシップの実施内容
〃	瀧澤 重博	教育実習との役割分担・事前事後指導
〃	内田 弘	教育委員会との連携等
〃	石浜 悦子	教育実習との役割分担・事前事後指導
〃	中 正美	学校インターンシップの実施内容

3. 課題認識

大学の教員養成課程においては、豊かな人間性と共に、理論と実践を融合させる能力、すなわち大学で学習した専門的知識・技術・幅広い教養を、学校現場で実際に機能する能力にまで高めることの必要性が求められている。特に重要なことは、学生一人一人が学校現場での体験だけで終わってはいけない。有意義な学校現場での体験を、大学で学ぶ理論と融合させて質の高い実践的指導力にまで高めていくために学校インターンシップを教職課程に位置づけていくことが重要な課題である。

4. 調査研究の目的

本調査研究では、4年間を見通した学校インターンシップを必修科目として教職課程に位置づける観点から以下の4点を目的とした。

- (1) 理論と実践の往還を目指した学校インターンシップの実施内容のあり方
- (2) 既存の教育実習との役割分担のあり方
- (3) 学生に対する事前・事後指導のあり方
- (4) 教育委員会との連携のあり方、学生側と受け入れ校側との Win-Win の関係構築のあり方、情報提供のあり方

5. 調査研究の具体的な内容・取組方法

4年間を見通した学校インターンシップを必修科目として教職課程に位置づける観点から以下の4つのことについて研究を行った。

(1) 理論と実践の往還を目指した学校インターンシップの実施内容のあり方

- ①開発した1年次から4年次の学校インターンシッププログラムを実施し、改善を行う。
- ②4年次の教員養成インターンシップの実施と改善を行う。

(2) 既存の教育実習との役割分担のあり方

- ①大学で学修する教科指導や生徒指導等の理論と学校現場での実践をつなぐ視点から学校インターンシップと既存の教育実習との役割分担について検討会議を行う。
- ②教員養成で求められる実践的指導力を明らかにし、既存の教育実習と学校インターンシップで育成する実践的指導力を明らかにし、学生の自己評価ルーブリックを作成する検討会議を行う。
- ③学校インターンシップと既存の教育実習の意義と目標分析について検討会議を行う。

(3) 学生に対する事前・事後指導のあり方（主として省察に関する指導）

- ①実習日誌等を利用した個人カルテを開発し、それを使った事前・実習中・事後での学生自身の考察方法を考案する。
- ②学校インターンシップを評価するルーブリックを開発し、事前・事後指導での目標設定と振り返り・省察の指導方法を考案する。

(4) 教育委員会との連携のあり方、学生側と受け入れ校側とのWin-Winの関係構築のあり方、情報提供のあり方

- ①学生や学校現場教員・教育委員会へのヒアリングを基に、学生側や受け入れ校側のニーズやメリットを明らかにし、情報提供のあり方を検討する。
- ②学校インターンシップの実施内容に関する意見聴取を行う。
- ③受け入れ校の確保や実習内容について検討会議を行い、教育委員会や学校と大学との連携のあり方を検討する。

について、理論と実践をつなぐ学校インターンシップについて検討する。

調査研究における教育委員会との連携

所沢市教育委員会

富士見市教育委員会

三芳町教育委員会

川越市教育委員会

朝霞市教育委員会

第2章 理論と実践の往還を目指した学校インターンシップ

加藤 尚裕・松原 健司・内田 弘

2.1 淑徳大学教育学部がめざしている教師像とは

本学は、「大乘仏教の理念」を建学の精神としている。この「大乘仏教の理念」は、「生命の尊厳」を究極の価値として強調するものである。本学の創立者である学祖長谷川良信は、それをく“together with him”^{※1}（「彼＝他者の為でなく、彼＝他者ととともに」の意）の実践を通じての理想社会の建設と真実な人間の育成をめざす教育理念として具現された。その意味するところは、「人間ひとりひとりの自立が社会の連帯を強め、同時に社会の連帯がひとりひとりの自立を支える」ことのできるような「共生の思想」^{ともいき}をめざすことである。すなわち、他の人々の恵みと、いろいろなご縁のお陰によって生かされているという「共生」^{ともいき}の精神と、その縁に報い、他の人々の幸せのために尽くすことを願って、利他の行いに励むことが大乘仏教の教えである。

本学部では、この教えを土台にして実学教育を旨とし、日進月歩する学問的成果を広くかつ積極的に学び、さらには進んで新たな分野を開拓し、それらを活用しうる叡智を身につけられる教師、逆境にあってもへこたれない力、自己犠牲、献身、利他主義、共生という考え方を身に付け、「教えるとはどういうことか？」を常に問い続ける教師になることを目指している。

※1 “together with him”とは、淑徳大学学祖の長谷川良信が彼の為に（for him フォアヒム）ではなく、彼と共に（together with him トギャザーウイズヒム）の意味で、救済は相救済互でなければならない。即ちフォアヒム（彼の為に）ではなく、トギャザーウイズヒム（彼と共に）でなければならないということを示している。

- ・「社会事業とは何ぞや」（長谷川良信選集編集委員会編『長谷川良信選集』上巻所収、長谷川良信：淑徳大学学祖[1890（明治23）年～1966（昭和41）年。

註）中央教育審議会（2015）答申では、学校インターンシップ実施のイメージ図で、大学の教職課程の学修内容として、1年次から4年次まで長期間を想定し、学校における教育活動や学校行事、部活動、学校事務などの学校における活動全般について、支援や補助授業を行うことを示している。本調査研究での「学校インターンシップ」という用語は、こうした考え方を基にしている。

なお、本調査研究の報告書では、これまでに本学部で実践してきた1年次・フィールドスタディⅠを「学校インターンシップⅠ」と、2年次・フィールドスタディⅡを「学校インターンシップⅡ」と、2年次から3年次の学校ボランティアを「学校インターンシップⅢ」と読み替えて整理した。

2.2 大学4年間で身に付けたい実践的指導力とは

一人一人の学生が本学部での4年間の学びを通して身に付ける実践的指導力には、様々な議論がある(佐藤他、2013)が、本学部では、大きく三つの要素があると考えている(図1)。一つには、豊かな人間性であり、二つには、高い専門性である。そして、三つ目は、教育者としての**責任感・使命感**である。これらの要素は、相互に関連しているものである。

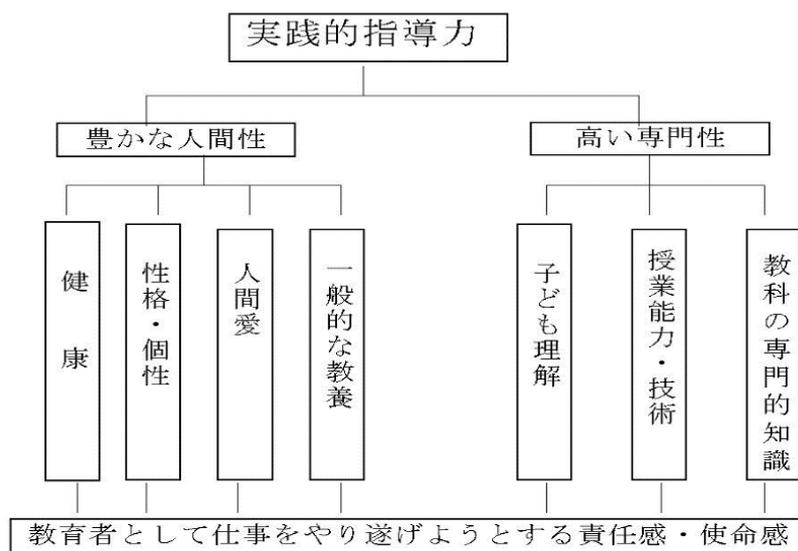


図1 実践的指導力

まず、「豊かな人間性」では、学校現場実習の意義とその重要性を認識し、自己の性格や能力、技術について振り返り、自己研鑽の必要性を知る、学校体験の中から自らの一般的な教養に関する知識不足、健康管理の重要性などに気づき、それらの習得を目指して努力し続けるなどである。

次に、「高い専門性」では、教科、道徳、特別活動、総合的な学習の時間の内容や指導、生徒指導や学級経営など、多くの先輩教師の指導を受けながら学校現場実習を行うことによって、児童を指導するのに必要な専門的知識や指導技術についての理解を深める、学習指導案を作成し、それに基づいて授業を実践する、いろいろな教科・領域の学習活動への参加体験を通して教え方について理解を深める、児童の生活の実態に触れ、生徒指導全般にわたって理解を深め、教育相談的手法などの具体的な指導方法について理解する、教材研究や指導技術について絶えず自己評価を試み、効果的な授業のあり方についての理解を深めるなどである。

最後に、「教育者としての責任感・使命感」では、児童に対して至誠をもって接し、共生という考え方に立脚し、教師としての責任感や使命感をもつ、学校組織の中における組織人としての教師の生活態度を身に付ける、公教育の役割や公務員としてのあり方の理解を

深める、先輩教師から教員としての心構えを学ぶ、児童や保護者から信頼される教師としての言動のあり方を学ぶなどである。

こうした考え方を基に、本学部では、4年間の正課外も含めた淑徳教師養成塾での学修を通して実践的指導力が修得できるものと考えている。

こうした考え方を基に、本学部では、以下の図2に示すような4年間の様々な学びを通じて、実践的指導力を育成することとしている。本学部への入学者は、入学前の2回のセミナーと入学前課題への取り組みの段階から、学習の動機付けがなされる。初年次教育の中でも小学校見学、卒業生の現任教員との交流、教育委員会や児童相談所職員の方々からの講話、ボランティア活動の推奨とその際のマナー指導などを設定し、学校インターンシップⅠに到るまでの準備がなされていく。この過程が、1年次の学校インターンシップに対する準備を整える時間ともなっている。さらに、各種ボランティアや学校インターンシップでは、複数の年次の学生が同時に活動する場合があります、先輩後輩がお互いに学び合う機会が生み出される。そうした体験を持って正課の授業を受け、4年間を通じて実践と理論の往還型学習を進めていくことが可能となる。後述するように、この4年間の学びの中で、長期間の小学校現場実習を実現しようとしたプログラムが「淑徳大学教師養成塾」である。

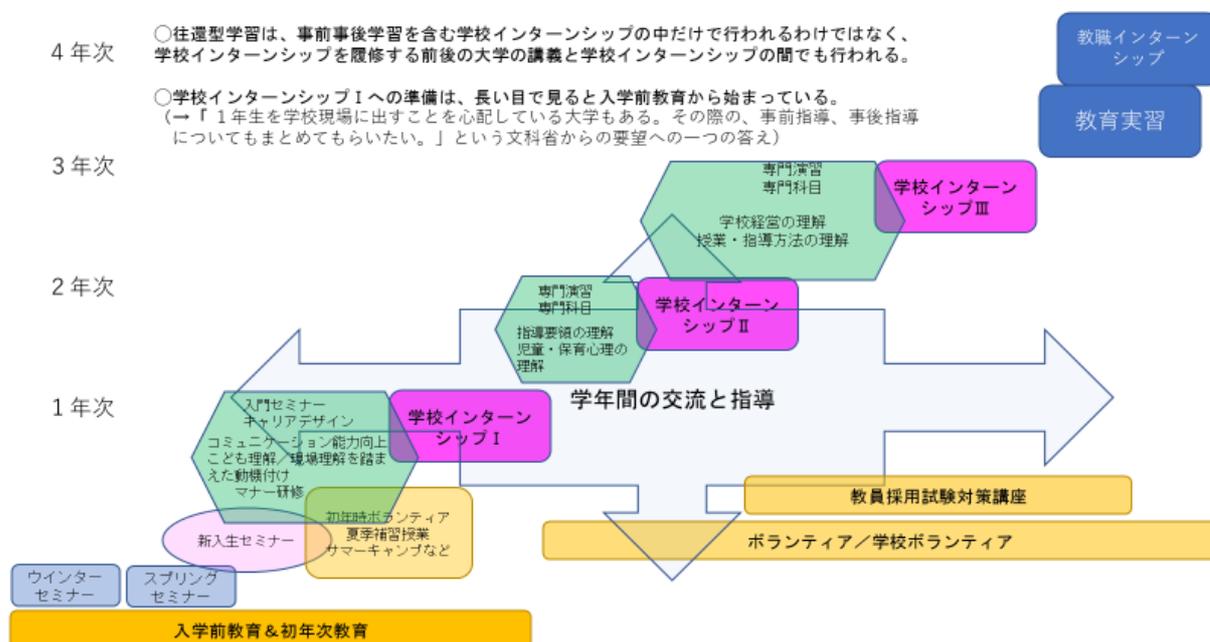


図2 淑徳大学教育学部の教員養成4年間学び

- ・佐藤仁・樋口裕介・吉田茂孝・岡花祈一郎（2013）実践的指導力をめぐる教員養成研究の新たな研究視角の模索—教育方法学、特別支援教育、保育者養成の議論を手がかりに—福岡大学研究論文集B6, 61-75.

2.3 淑徳教師養成塾とは

本学部では、従来から行われている教育実習だけでは不十分であると考え、「淑徳教師養成塾」を立ち上げることにした。

その理由として、将来、学生が教師となって学校現場で児童を指導していくためには、大学の講義で学んだことが、教科指導・生徒指導・学級経営・児童理解において、理論的根拠として日常の指導場面で瞬時の判断に活かされる知識・技能になっていることが必要である。もう一方で、児童との相互作用をとおしながら実践・省察を繰り返す中で、学んだ知識・技術が固定的なものとしてではなく、時と場に応じて柔軟な対応が可能な、児童と共に成長していける能力として形成されることが必要である。

こうした判断の根拠としての専門的知識・技術は、教員養成課程において確かなものとして身に付けていくためには、学生自身が自分の力で小学校現場に応用できるような形で獲得していくことが必要である。そのためには、従来の教育実習だけでは、教員養成課程で学ぶ専門的知識と学校現場での体験との往還型学修を繰り返し行うことが不十分であり、学生自身がリアルな感覚をもちながら自分の言葉で児童への指導方法を考え、自分の言葉でその指導の根拠となる理論を語れるようになるためには、「淑徳教師養成塾」で長期間の小学校現場実習をさせることが必要であると考えたからである。

こうした考え方は、中央教育審議会（2015）答申『これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について』でも、「学生が長期間にわたり継続的に学校現場で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての的確性を把握するための機会としても有意義である」と述べられている。

本学部では、学生に小学校現場での実践を長期的に体験させるだけでなく、その体験を如何にして大学で学ぶ理論と融合させていくのかという視点での指導方法を考案することも必要であると考えている。具体的には、4週間の教育実習で獲得できる教員の資質・能力を相補するため、大学在学4年間を通し長期継続的に、教育委員会、小学校現場の要請に基づく教育ボランティアや学校インターンシップの直接的な実践の機会をもてるようにし、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成を構造化した「淑徳教師養成塾」のカリキュラムを考案した（図3）。

なお、一般的にボランティア（volunteers）とは、「自主的に社会活動などに参加し、奉仕活動をする人」（ウィキペディアより、2017. 7.26 取得.）であることから、本学部では、教育委員会や小学校現場の要請に基づく教育活動（夏季宿題教室や地域児童教室等）に、学生が自主的に参加し活動する体験を「教育ボランティア」と呼び、「学校インターンシップ」と区別している。また、「学校インターンシップ」とは、本学部では、大学の教職課程の学修内容として、1年次から4年次まで長期間、学生が小学校における教

育活動や学校行事などの学校における活動全般について支援や補助授業を行う体験活動であり（中央教育審議会，2015）、教職課程の単位となる科目である。

・中央教育審議会（2015）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について～学び合い、高め合う教員育成コミュニティの構築に向けて～」（答申）平成27年12月21日、33-34。

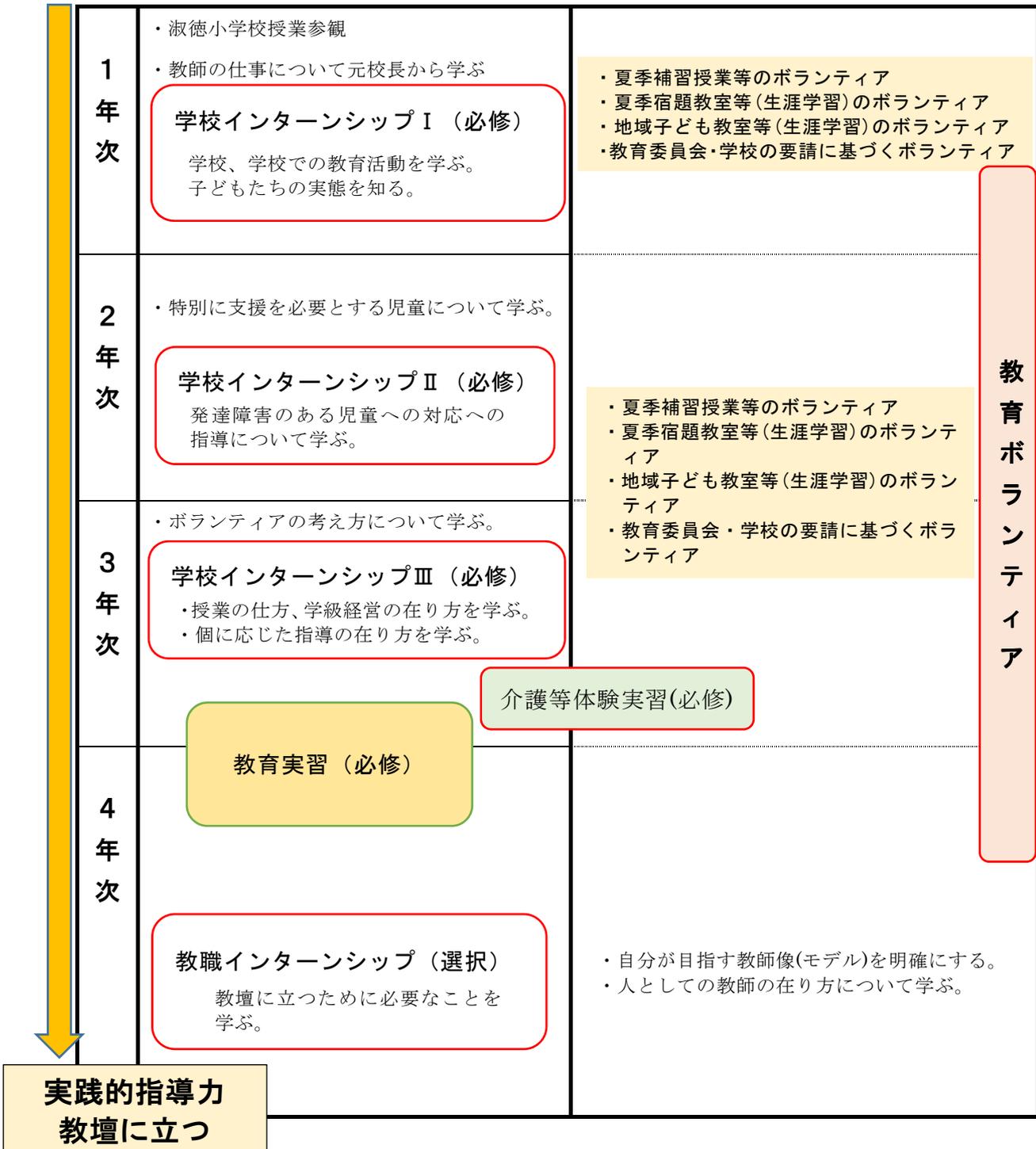


図3 淑徳教師養成塾の概要

2.4 学校インターンシップの基本的な考え方

本学部の学校インターンシップは、文部科学省・厚生労働省・経済産業省「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（2014）で示されていることを参考に、**図4**に示すように大学、学生、小学校現場がそれぞれ Win-Win の関係になるような取り組みを行うことが重要であると考えている。

学校インターンシップは、学生と大学だけにメリットがあるものではない。教職員の数が限られている学校においては、児童の活動時の安全確保や授業中の児童への個別対応等に学生が関わることで、教育効果を高めることもできる。

一方、団塊世代が定年退職した後、教員の平均年齢、勤続年数が若年化する傾向が加速している。したがって、学校現場におけるミドル・リーダー、管理職候補の育成を急がねばならなくなっている。このような状況で、若手教員がインターンシップの学生を指導する経験を積むことは、早期からのリーダー教育、研修と同様の効果をもたらすものと期待できる。



図4 学校インターンシップの基本的考え方

・文部科学省・厚生労働省・経済産業省（2014）「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」平成26年4月8日。

また、学生の「教師になりたい」というモチベーションを持続していくためにも、教師は、教室の雰囲気も毎日違い、子達と毎日過ごしている中でも毎日変化する仕事をしていて、とっても楽しいと思わせる。それともう一つ、もっている力を児童にぶつけると、児童は一生懸命答えようとして、努力して、結果を出してくれることを実感させられるような学校インターンシップになるように工夫することが重要である。

本研究では、こうした考えを基本として、大学の教職課程の学修内容としての学校インターンシップを下記のように整理した。

(1) 実践的指導力を身に付ける

学校インターンシップでは、教師を目指す学生が教育の現場で一人一人の児童の教育に直接関わることを通して、教師として必要な実践的指導力を学びとることである。実践的指導力を支える資質として一般的に言われていることは、豊かな人間性、幅広い社会性、高い専門性であり、さらに、教職への使命感、情熱、そして、児童との信頼関係を築ける適格性である。学校インターンシップでは、こうした実践的指導力を、具体的な体験を通して学ぶ場である。

(2) 理論と実践をつなぐ

学校インターンシップは、大学で学んできた一般教養・専門教養・教職教養などの学修の上にたって行われるものである。すなわち、「理論と実践」をつなぐことこそが学校インターンシップの主な使命であると言っても過言ではない。学校インターンシップは、児童が好き、児童の発達に貢献しようとする強い教育愛の持ち主でなければ勤まらない。学生の一人一人が学校インターンシップにおいて、教師という仕事の体験を通して実践的指導力を身に付けた教師になるべく、教育に対する基本的な考え方と教育者としての基礎力を学びとっていく必要がある。

(3) 教育への情熱を確認する

学校インターンシップの中で、児童や先輩教師から様々な事柄を学び、自分の実践的指導力を振り返ることによって、教師の専門職としての能力の必要性を、身をもって感じる事が重要である。学校インターンシップは、そうした振り返りの経験を通して教育に対する理念と情熱を再認識したり、自らの教職への適性や進路を考える貴重な機会であったりするところにも大きな意義がある。

(4) 教育者としての態度を確立する

学校インターンシップでの実践では、児童や教師や学校が様々な出来事を織りなしながら、教育が行われている中に身をおき、児童一人一人の貴重な時間を借りて学んでいるという心構えをもつことが大変重要である。将来の教育者を志す者にとっては、このような態度こそ、教師としての重要な資質の一つとなっていくものである。

2.5 学校インターンシップを支える組織と情報共有

(1) 学校インターンシップを支える大学教員と養成センターとの関係

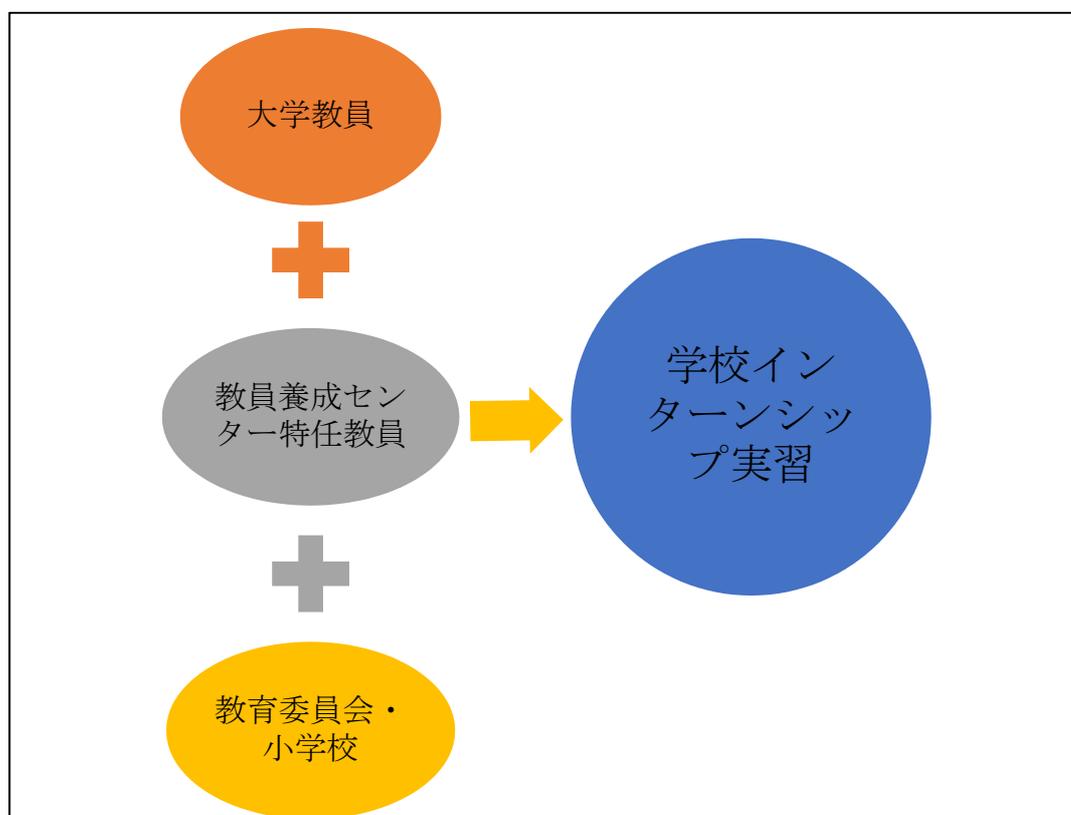


図5 学校インターンシップを支える組織

学生にとって学校インターンシップが効果的に機能していくためには、講義等があり、大学教員だけでは小学校現場に出向いて一人一人の学生に対して指導する時間的なゆとりが十分ない。そこで、教育学部では、附属施設の教員・保育士養成支援センターを設置している。そして、そのスタッフが連携協定を結んでいる近隣の三芳町・富士見市・所沢市・川越市・朝霞市教育委員会や小学校現場との連絡調整役をしたり、実習中の指導を行ったりして、一人一人の学生の実習をサポートしている。

教員・保育士養成支援センターのスタッフ5名は、元小学校の校長であるため、小学校現場の実情にも精通しており、教員養成段階で学生に身に付けるべき小学校教員として必要な資質・能力の具体的な内容に関する知識や技能も十分に理解している。したがって、こうした現場経験のあるスタッフは、大学・小学校現場（教育委員会）・学生、それぞれの立場でWin-Winの関係をつくり、学校インターンシップを支援するための大学側、小学校現場（教育委員会）の互恵的な関係に基づく組織体制ができる（図5）。

(2) 教員間の情報共有のあり方

学生の実践的指導力を身に付けていくためには、学生を支援・指導する大学教員と教員・保育士養成支援センター特任教員が学校インターンシップにおける学生の活動や指導歴の情報の共有化を図っていくことが重要である。

しかし、図6のように、例えば、17K2020の学生に対して、学校インターンシップでは、教員Aが学生の活動に携わり、学校インターンシップⅡでは、教員Bが指導に携わるなど、実習ごとに指導者が変わり、その指導情報①から④が共有化できていない現状がある。

こうした問題点を解決していくために、本学部では「学校インターンシップ個人カルテ」の活用を検討しているところである。

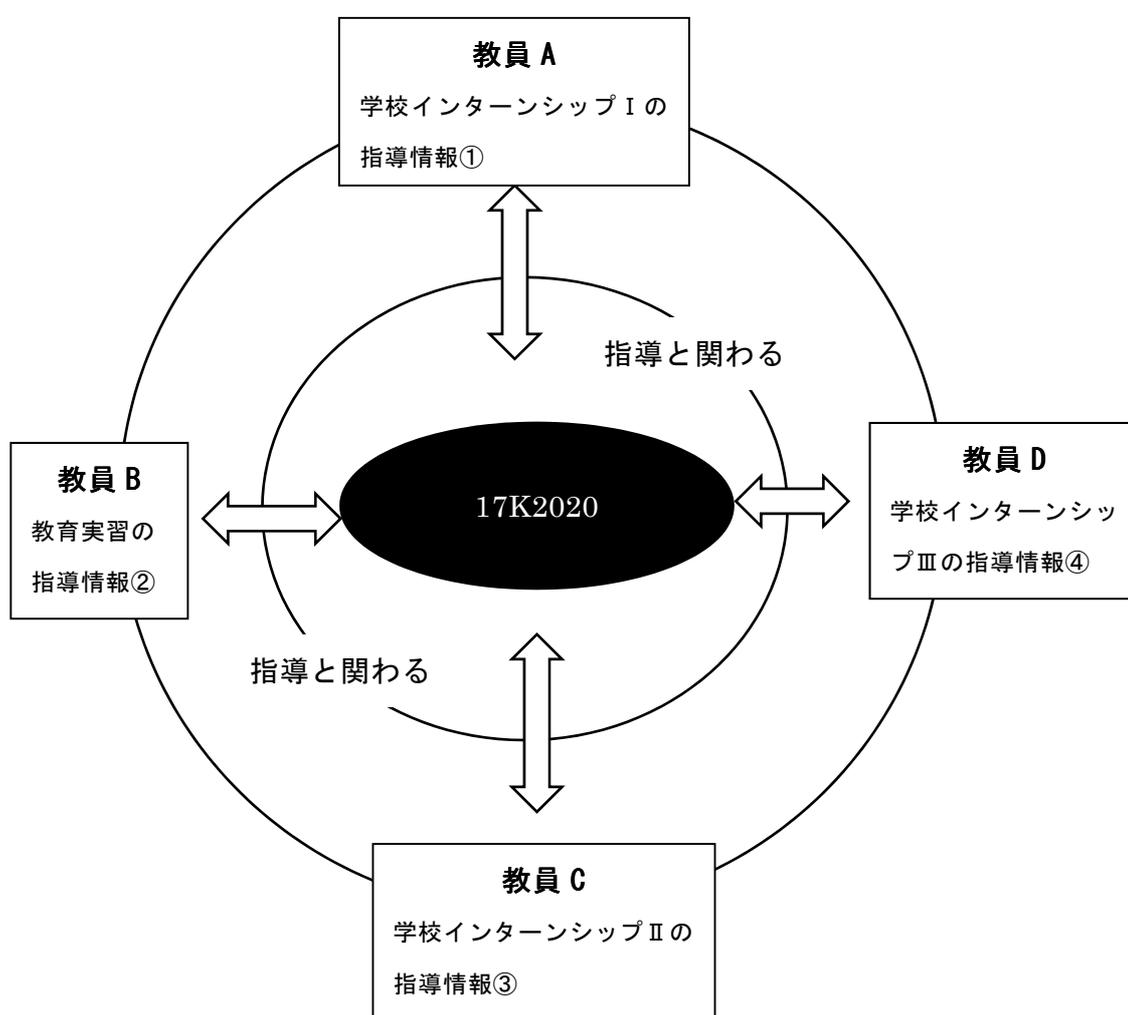


図6 教員間の情報共有化

第3章 学校インターンシップの実施内容のあり方

松原 健司・矢島 健三・中 正美・加藤 尚裕

3.1 理論と実践の往還を目指した学校現場実習の基本的な考え方

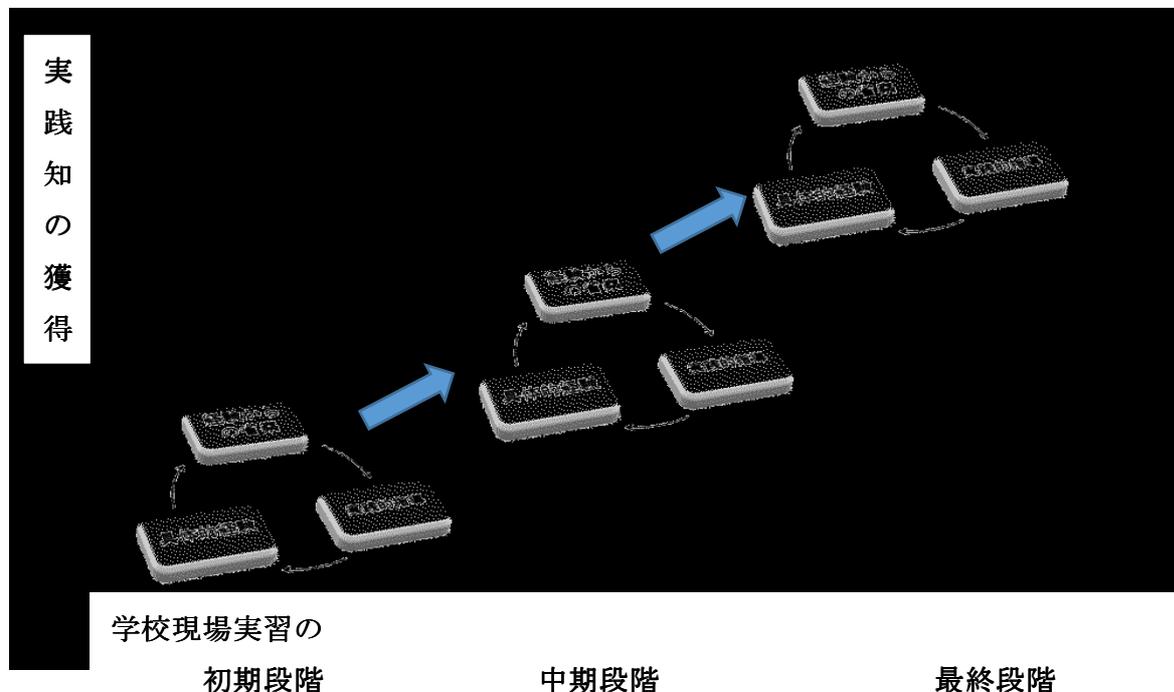


図7 学校現場実習モデル

脇本ら（2015）は、教員養成を通して、「理論と実践」をつなぐといった往還型学修を進めるためには、若手教師は失敗から学ぶことが熟達していく際に重要であり、さらに、若手教師が学んでいくためには、経験をいかに振り返るかということも重要であると指摘し、経験を振り返るための具体的な方法についても学習モデルを示している。

本研究では、この学習モデルの考え方を参考にして、学生一人ひとりが実践的指導力の基礎を獲得するためには、4年間を通した段階的な実習とそれに伴った事前・事後指導が重要であると考え、図7に示すような本学部の教員養成における学校現場実習モデルを考案した。

この学習モデルは、「具体的経験」から始まり、「経験からの省察」、「実践的指導」、そして、再び「具体的経験」、「経験からの省察」、「実践的指導」を繰り返す。そして、3つのプロセスは、初期段階から中期段階を経て最終段階へと螺旋状に学習を繰り返すサイクルを通して、実践知^{*2}を獲得していくものである。

具体的には、初期段階に相当する学校インターンシップⅠ・Ⅱの「具体的経験」では、

学生が児童と触れ合う、教員の仕事を知る、障がいのある児童への対応を学ぶなどである。次の中期段階に相当する学校インターンシップⅢの「具体的経験」では、授業の仕方、学級経営の在り方を学ぶ、個に応じた指導の在り方を学ぶ、あるいは、目指す教員像を明確にしたり、自分の将来を考えられる経験をしたりするなどである。そして、最終段階に相当する教育実習や教職インターンシップの「具体的経験」では、教授法についての知識やスキルや授業中の児童への柔軟な対応を学ぶ、人としての教員の在り方に関する経験へと学びの質を高めていく、学校・児童・教職員への適応能力を高める人間関係づくりができるなど、教員として第1歩を踏み出すための希望と自信を持つような経験をすることである。

こうした段階的なカリキュラムに対する事前・事後指導が重要な役割を果たす。具体的には、「具体的経験」を基にした「経験からの省察」である。特に、児童の状態を把握し、自分自身の指導のあり方の状態を自分でしっかりと把握するといったメタ認知的な省察的思考をすることである。この省察的思考とは、たとえば、授業の営みの中では、「自分の期待通りに動かない」「焦る」「わからない」「悩む」など、教師や児童の中に、さまざまな意図のズレや感情反応が生起する。教師は、授業の営みの中で浮き沈みする、この主観的反応は何から生起しているのか、その意味内容を敏感に感じ取りながら、柔軟にかつ適切に対処するために振り返って考えることである（丸野、2008）。そして、「経験からの省察」で得られた振り返りの成果を、今後の学校現場での実践に生かせるような「実践的指導」へと整理し、学生が学校現場の実践の場で、それを利用し経験することで、実践知が獲得されていくことになると考えられる。

-
- ・脇本健弘、町支大祐（2015）『教師の学びを科学する：データから見える若手の育成と熟達のモデル』北王子書房。
 - ・丸野俊一・松尾剛（2008）第5章対話を通じた教師の対話と学習、p.75.秋田喜代美、キャサリン・ルイス（2008）『授業研究 教師の学習 レッスンスタディへのいざない』明石書店。

※2 実践知とは、学校現場等で個人的な経験を通して積み重ねる中で培われ、その教師独自の子どもを指導する行為の理論である（秋田、2000）

- ・秋田喜代美（2000）『子どもをはぐくむ授業づくり』岩波書店

3.2 学校インターンシップのカリキュラム

ここでは、実際にどんな内容を実習するのかを紹介し、その実習内容から、教員として必要な資質能力として、どのようなことを学ぶことができるのかについて整理する。

(1) 学校インターンシップⅠの実施内容（1年次・後期・必修）

（6時間／日×10日）60時間 （事前・事後指導を含む）1単位

<目標>

教師の仕事を観察し、手伝い、児童と触れ合うことにより、教師の仕事を理解することや、小学校の教師を目指す為に、今後自分が学ばねばならないことを自覚することができる。

<主な学習内容>

学生が「学校とは、教師の仕事とは何か、自身が教職に就くまでに学ばねばならないこと、身に付けなければならないことは何か」を思考し、学ぶ、体験的実習の場である。初等教育コース1年次の学生にとっては、正課科目カリキュラム上での体験実習であると共に、淑徳教師養成塾の、特に、学校インターンシップに取り組む際の基礎知識・技能・礼儀など、TPOを身に付ける場でもある。

<関連科目>

関連科目として、「入門セミナー（2単位・1年次開講）」での淑徳小学校の授業参観、「キャリアデザインⅠ・Ⅱ（各2単位・1年次開講）」での学校インターンシップ関連の内容を受講する。

<単位認定方法>

小学校での10日間の実習と学校側の評価用ルーブリック60%、実習記録20%、レポート・発表の内容等20%で総合的に評価する。

(2) 学校インターンシップⅡの実施内容（2年次・後期・必修）

（6時間／日×10日）60時間 （事前・事後指導を含む）1単位

<目標>

障がいのある子への対応や特別な配慮を要する子への指導について理解することができる。

<主な学習内容>

障がいのある子への対応や特別な配慮を要する子への理解と支援のあり方が注目されている。そうした児童への支援をしっかりと行うためには、発達障害の理解は不可欠であり、さらにその特徴に合わせた支援のあり方を理解しておく必要がある。そこで、本授業では特別支援学級や特別支援学校に実習に出向き、発達障害のある児童と実際に触れ、さらに学校現場の先生方がどのような教育や支援を行っているかについて、大学で学んだ理

論と現場での体験をもとにする往還的な学びを通して理解を深める

<関連科目>

関連する科目として、「特別の支援を必要とする幼児、児童及び生徒に対する理解」を学ぶために「特別支援教育（2単位・1年次開講）」を受講する。介護等体験実習（2単位・3年次開講）」を受講する。また、学校インターンシップⅠを履修済みであること。

<単位認定方法>

小学校での10日間の実習と学校側の評価用ルーブリック60%、実習記録20%、レポート・発表の内容等20%で総合的に評価する。

(3) 学校インターンシップⅢの実施内容（3年次・通年・必修）

（6時間／日×20日）120時間 （事前・事後指導を含む）2単位

<目標>

自分自身の課題を意識しながら小学校の現場に出向き、授業の仕方、個に応じた指導の在り方、学級経営等、実践的指導力をもった教師について考えることができる。

<主な学習内容>

主な内容は、学校教育活動（教育課程及びそれに準ずる活動）の中で、小学校現場が大学生の補助を必要とするものについて、受入れ校の先生方の指導の下で教育活動を行うものである。たとえば、国語、算数などの教科指導への支援活動、児童の学習・学校生活への支援活動、放課後に行う児童の学習相談や遊びへの支援活動、その他、校長が認める活動への支援などである。

<関連科目>

学校インターンシップⅠ・Ⅱを履修済みであること。

<単位認定方法>

小学校での20日間の実習と学校側の評価用ルーブリック60%、実習記録20%、レポート・発表の内容等20%で総合的に評価する。

(4) 教職インターンシップの実施内容（4年次・後期・選択）

（6時間／日）×10日 （事前・事後指導を含む）1単位

<目標>

主として教材研究の仕方や授業実践、学級経営の在り方、生徒指導等に関する実践的指導力の基礎を身に付けることができる。

<主な学習内容>

教育実習との違いは、自分の得意とする、勉強したい分野に関する指導法を身に付けるために、その道の達人と呼ばれて先生について学ぶ、いわゆる「師弟制度」方式で学ぶ。

事前学習では、教科指導、教材研究、学習指導案作成、模擬授業、学級経営や教育評価

などについて学ぶ。そして、特定教科・領域に絞って個人の課題設定を行う。例えば、算数の指導を得意としている受け入れ校の先生の下で、一つの単元が終わるまで、その先生と一緒に教育活動にあたりながら算数科指導法について学ぶ。具体的には、授業準備の手伝いをしたり、授業を参観したりして、自ら課題をもって質問をするなど、主体的に学び、中間報告を通して個別指導を受ける。最後に、それぞれの学生が教職インターンシップで学んだことを中心に「教職インターンシップ報告会」を行う。

<関連科目>

関連する科目として、教材研究の方法を理解するために「教材研究」、生徒指導等の場面指導の具体的方法を理解するために「事例研究」を受講する。

<単位認定方法>

小学校での10日間以上の実習記録日誌と自己評価用ルーブリック60%、中間発表・事後発表の内容等40%で総合的に評価する。



教職インターンシップ報告会風景

第4章 学校インターンシップと教育実習との役割分担

岡野 雅一・瀧澤 重博・石浜 悦子・加藤 尚裕

ここでは、大学で学修する教科指導や生徒指導等の理論と教育現場での体験をつなぐ視点から学校インターンシップと既存の教育実習との役割分担を、どのように考えているのかについて述べる。また、それぞれが役割を果たす為には、学校インターンシップと教育実習では何を求めているのかという目標や実習内容（概要）を明確にする。なお、本研究では、学校インターンシップと既存の教育実習とは、相補関係にあると考えている。

4.1 学校インターンシップと教育実習の目標

力量ある質の高い教員が求められる中、養成段階において、学生が学校現場に出向き、教師の仕事を理解することや様々な教育活動を経験することは、大学での学びを確かなものにする上で欠かせない。学校インターンシップは、教育実習に比べ、長期にわたって学校や教師、児童とかかわることが可能な点に特長がある。学生が児童と長期にわたりかかわることで、様々な教育活動を経験することができるとともに、児童の変容を見届けることも可能になる。

中央教育審議会（答申）「これからの学校教育を担う教員の資質能力の向上について」（平成27年12月21日）では、学校インターンシップの重要性について「学生が長期間にわたり継続的に学校現場で体験的な活動を行うことで、学校現場をより深く知ることができ、既存の教育実習と相まって、理論と実践の往還による実践的指導力の基礎の育成に有効である。また、学生がこれからの教員に求められる資質を理解し、自らの教員としての的確性を把握するための機会としても有意義であると考え」と、述べられている。また、学校インターンシップの実施に当たっては、既存の教育実習との間で、役割分担することが求められている。

学校インターンシップと教育実習との大きな違いは、学校インターンシップが教員の補助的な活動であるのに対し、教育実習では、担任に代わって、授業実践等を行う点にある。従来における教育実習を中核とした教員養成は、実践的な資質・能力の形成には不十分であるとする実態がみられる。実践的・体験的な学習の機会を増加させる場合、総合的な観点から教員養成における資質・能力を育成するための具体的な学習方略を考える必要がある。そのうえで、教育実習と学校インターンシップの役割の明確化と相乗効果について具体的に把握する必要がある。

そこで、ここでは、学校インターンシップで身につけるもの、教育実習で身につけるものを洗い出し、効果的・効率的な実習のあり方の具体化について検討した。

(1) 学校インターシップの導入による教育実習との相補関係について

最近の学校は若手教員の増加によって、教員の資質・能力の低下が危惧されている。そのことに対する方策として大学における教員養成の充実が求められている。新任教員が一人前の教師力を持つことは難しいにしても、早く実践的指導力を身につけてほしいという期待は大きい。そのために大学で学んだことが学校の教育実践に活用できる具体的で効果的な教員養成の方略が求められる。その一つが学校インターシップであるだろう。

学校インターンシップは、学校現場で長期間継続的に体験活動を実施することが可能である。つまり、大学在学4年間を通して学校に関わることができれば、自ずと学校理解が促進される。また、教育実習の期間を4週間等と定めて直接的な実践の機会をもつことで、教員のあり方が実感でき、長期継続的に培った学校理解がさらに促進される。一方、「自らの教員としての的確性が十分でないと判断する場合は、教員を希望しないことができる。

このような教職体験の拡大を大学として構造化するために、従来からの教育実習を中核としながら、学校インターンシップや学校ボランティアとの相補関係を確立することが必要である。なぜ、教育実習を中核とするかと言えば、4週間という短い期間でありながら、学校教員とほぼ同等な授業展開や子供の指導を可能とするからである。

そこで、次のように相補関係を考えたい。

- 第1期 1・2年次及び3年次、教育実習以前の学校インターンシップでの活動
学校理解の促進と実践的指導力獲得のための準備期
- 第2期 3年次または4年次における教育実習による実際的な教員志望の自覚
実習的・実践的体験による試行的な自己能力の開発
- 第3期 4年次教育実習以後の教職インターンシップ
教育実習の体験を補強し、教員採用に備える

学校インターンシップや学校ボランティアは、4年間を通して学校との関わりをもつことが可能であるから、学校現場の理解促進は可能である。教育実習で獲得できる体験的・実践的な学校理解を補強する役割を十分もてることから、将来における教員の資質・能力の向上に向けた、相補関係を総合的に構想すべきである。

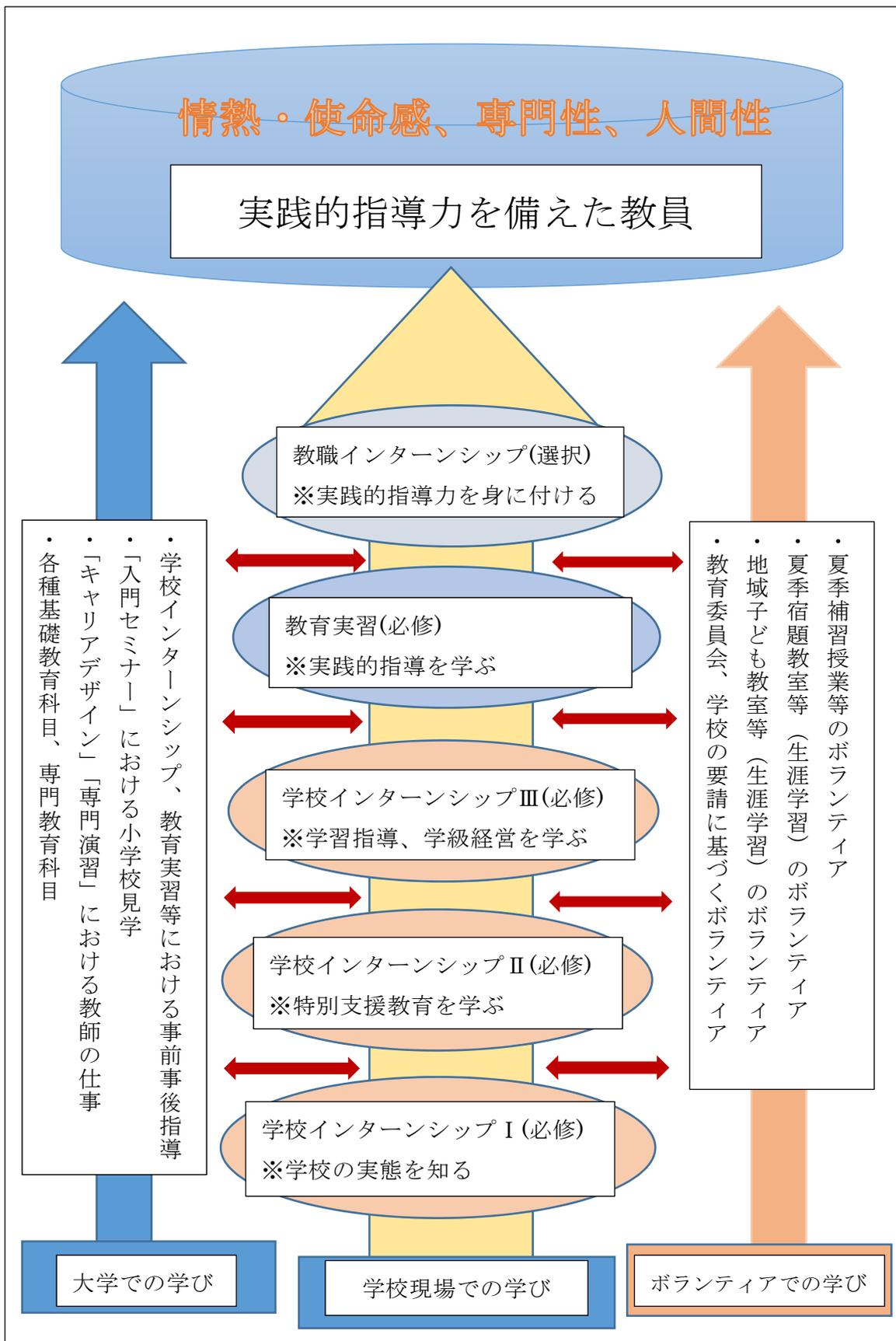


図 8 教育実習と学校インターンシップ等の位置付け

(2) 教育実習と学校インターンシップ等との相互の役割分担と強化策について

学校インターンシップ等の導入は、学生の大学生活を大きく見直す機会を与えるだけでなく、多忙化もまた極めて促進する。そこで、教育実習など、それぞれの役割を効果的・効率的に進める必要がある。特に教育実習の場合は、学校インターンシップ等によって学校理解や実践的な対応のあり方などの理解がかなり進んでいることを前提として考え、「教育実習だから特にやりたい」事項に絞ることが必要である。その意味で、表1「教職課程の学修を通して育成する資質能力」を分析的に検討し、重点化を図るべきである。

例えば、電話のかけ方、学校訪問の仕方、教員との接し方等の基本的な対応は、学校インターンシップ等の場で身に付けるようにする。あるいは、授業実践や児童理解と指導に重点化するなどの、教育実習ならではの体験を重視したい。そして、学校教師が、どのような点を課題と考え、指導をどう改善したいと考えているかなど、教員のもつ教育の願いについての理解を学生に学ばせていきたい。

なお、授業実践等は「体験」のみで終わる場合が多い。改善策は短期間では難しく、むしろ「よい授業」のイメージを指導教員の授業等から学びたい。教育実習終了後、授業のあり方について学ぶ機会を作りたい。「主体的・対話的で深い学び」など、授業体験がバックにあれば、理解が促進されるのである。

(3) 教育実習について

教育実習は、大学等で学んだ知識（学問的研究）や経験などを、学生が主体的な立場で実際に授業するなど、教員としての実践的能力を高める極めて重要な方法として従来から重視されてきた。教職を志す学生が大学の授業のみでは容易に得ることのできない教育学的能力、特に教育実践スキルを児童との接触によって集中的に学ぶことができる機会である。その意味で、教職に予定されている実践的指導力を経験的・实际的に学ぶ場であると言える。

ただ、従来の教育実習はそれのみを単独に実施していたために、学校理解や実践的指導力が十分身につけていないという批判が多くみられた。そこで、教育実習の期間を延ばすなどの提言もみられたが、受け入れる学校や大学等の時間確保が難しく、期間延長は一部受け入れられる程度になっている。

それに対して、新たな方策として浮かんできたのが学校インターンシップや教育ボランティアの考え方である。学生が学校と直接関わることで、学校理解が促進され、教員には何を必要とされるかという考え方が醸成されることで、実践的指導力の獲得に意欲的に取り組んでいけると言える。しかしながら、学校インターンシップ等は、学生が主体的に授業をするなどの経験は与えられないため、学校経験知は限定される。そこで、重要になるのが、学校インターンシップ等で学んだことが、教育実習にどうつながり、それ以後の教師力をどう形成するかである。

4.2 学校インターンシップと教育実習を通して期待できる主な成果

ここでは、学生が学校インターンシップと教育実習を行うことにより、どのような成果が期待できるのかを整理する。

(1) 身に付けられる小学校教員に必要な基礎的な資質能力

学校インターンシップと教育実習の学修を通して重点的に身に付けてほしい小学校教員に必要な資質能力の基礎的な内容を表 1 に整理した。専門性に係る項目として、「学校教育についての理解」「子どもについての理解」「教科・教育課程に関する基礎知識・技能」「教育実践」を位置付けている。また、人間性に係る項目として、「他者との協力・コミュニケーション」を位置付けた。さらに、情熱・使命感に係る項目としては、課題研究を設定し、学生が自ら自身の課題を意識し、謙虚な姿勢で学び続けることを求めている。

専門性、人間性、情熱・使命感をバランスよく養うことが大切であるが、様々な課題に対しチームとしての対応が求められる学校現場の状況や、児童だけではなく保護者や地域の人等、様々な人とのかかわりが求められる教師の特質を踏まえ、人間性に係る項目については、1年次の学校インターンシップⅠの段階から、継続的に育成する資質・能力として位置付けている。さらに、特別支援教育の重要性が叫ばれる中、学校インターンシップⅡでは、特別支援学校・学級への実習を位置付け、特別支援教育に係る基礎理論・知識の習得に重点を置いている点にも特徴がある。

なお、この表 1 は、文部科学省の教育課程委員会「教職実践演習の実施にあたっての留意事項」(2008.10.24)「履修カルテの活用法(例)」を参考にして作成した。また、この表 1 の評価項目に応じて、学校インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ、教育実習、教職インターンシップの実習公表か票を作成すると共に、表全体を学生による自己評価ルーブリックとして活用している。

表 1 インターンシップを通して育成する資質能力		カリキュラム				
		1年次	2年次	3年次	4年次	
		●: 学校インターンシップ I (1年次) ○: 学校インターンシップ II (2年次) ◎: 学校インターンシップ III (3年次) ■: 教育実習 (3年次または4年次) □: 教職インターンシップ				
項目	指 標	1年次	2年次	3年次	4年次	
専門性	学校教育についての理解	小学校教師を目指す者としての誇りと責任をもち、子どもや保護者、社会が寄せる信頼と期待を具体的に理解している。			◎	■
		学校における教育活動の様々な場面において、基本的な法令を基にして行動することの重要性を理解している。				■
		保護者や地域(学校応援団など)との連携・協力の重要性を理解している				■
	子どもについての理解	子どもの理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得している。			◎	■ □
		学級集団づくりのために必要な基礎理論・知識を習得している。			◎	■ □
		カウンセリングマインドや教育相談的手法をもとに、子ども一人ひとりの特性や状況に応じた理解ができる基礎的技能を身に付けている。		○	◎	■ □
	教科・教育課程に関する基礎知識・技能	小学校学習指導要領や教科書の内容に係る基礎理論・知識を習得している。				■ □
		各教科等の学習指導の方法に関する基礎理論・知識を習得している				■ □
		ICT(情報通信技術)の活用に係る基礎理論・知識を習得している				■ □
		特別支援教育に係る基礎理論・知識を習得している。		○	◎	
		子どもの発達段階や実態、状況に応じた学級経営案を作成する方法を理解している				■ □
	教育実践	教材研究を生かした授業を構想し、子どもの反応を想定した学習指導案としてまとめることができる				■ □
発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている					■ □	
授業力向上のためのPDCAサイクルを理解し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けている					■ □	
児童一人一人の学習状況を把握し、個に応じた指導をすることができる。					■ □	
人間性	他者との協力・コミュニケーション	子どもたちの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる	●	○	◎	■ □
		上司や同僚に、適切に報告・連絡・相談をしたり、保護者や地域住民からの相談に対処したりできる能力を身に付けている		○	◎	■
		挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けている	●	○	◎	■ □
		上司や同僚、他の職員の意見やアドバイスを耳を傾け、積極的に学ぼうとしている。	●	○	◎	■ □
情熱・使命感	課題探究	自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢をもっている	●	○	◎	■ □

項目タイトル	優秀	標準	努力を要する	不十分
教師としての使命感	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出したり伸ばしたりするために子どもと積極的にかかわっている。	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出したり伸ばしたりするために子どもとかわかっている。	子ども一人一人の実態や状況を把握するために子どもとかわかっている。	目の前の子どもと、なかなかかわかることができない。
法令を基にした理解	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、法令をもとに理解している。	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、法令をもとに部分的に理解している。	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、理解している。	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、理解していない。
保護者や地域との連携	保護者や地域住民等と連携して、学校の教育力を高めていることを理解している。	保護者や地域住民等と連携して、学校の教育力を高めていることを概ね理解している。	保護者や地域住民等と連携していることを概ね理解している。	保護者や地域住民等と連携していることを概ね理解していない。
子どもについての理解	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得している。	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を概ね習得している。	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を少し習得している。	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得していない。
学級集団づくり	学級の規範づくりや教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を積極的に行っている。	教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を行っている。	清掃指導、給食指導だけを行っている。	清掃指導、給食指導の場において、なかなか指導できずにいる。
児童理解と教育相談	児童一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、状況に応じた的確な判断を行い、適切に褒めたり叱ったりする対応方法を身に付けている。	児童一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、教師として、褒めたり叱ったりすることができる。	教師として褒めることはできるが、叱ることができない。	教師として褒めたり叱ったりすることができない。
学習指導要領教科書	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら系統性や関連性を踏まえて理解している。	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら少し理解している。	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら少し理解している。	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら理解することができない。
教材研究	学習指導要領の各教科等の目標や内容を踏まえ、児童の反応を想定しながら授業の準備のための教材研究ができる。	学習指導要領の各教科等の目標や内容を踏まえ、授業の準備のための教材研究ができる。	授業の準備のための教材研究ができる。	授業の準備のための教材研究が不十分である。
ICT活用	ICTの活用に関心をもち、各教科等の授業場面において、ICTを効果的に活用し授業の効率を高める方法を理解できる。	各教科等の授業場面において、ICTを効果的に活用し授業の効率を高める方法を理解することができる。	各教科等の授業場面において、ICTを活用する方法を理解できる。	各教科等の授業場面において、ICTを活用する方法を理解していない。
特別支援教育	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解するとともに、障害のある児童への対応について理解できる。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解するとともに、障害のある児童への対応について少し理解できる。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解できる。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解していない。
学級経営	子どもの発達段階や実態、状況に応じた子どもの理解する方法や学級経営の具体的な方法等について理解できる。	子どもを理解する方法、学級経営の具体的な方法等について概ね理解できる。	子どもを理解する方法、学級経営の具体的な方法の一部を理解できる。	子どもを理解する方法、学級経営の具体的な方法を理解していない。
学習指導案	教材研究を活かした授業を構想し、子どもの反応を想定した指導案を作成することができる。	教材研究を活かした授業を構想した指導案を作成することができる。	授業を構想した指導案を作成することができる。	授業を構想した指導案を作成することができない。
指導技術	子どもの反応を活かした授業を展開ができ、発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術の一部しか身に付けていない。	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けていない。
授業の反省・改善	PDC Aサイクルに基づいた授業の振り返り、成果と課題をきちんと整理し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けている。	授業の振り返り、成果と課題を整理し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けようとしている。	授業の振り返り、成果と課題を整理することができる。	授業の振り返り、成果と課題を整理することができない。
個に応じた指導	児童一人一人の学習状況を的確に把握し、指導の手立てを考えた上で、一人一人に応じた指導を展開し、子どもを伸ばしている。	児童一人一人の学習状況を的確に把握し、指導の手立てを考えた上で、一人一人に応じた指導を展開している。	児童一人一人の学習状況を的確に把握することに努め、一人一人に応じた指導を展開しようとしている。	児童一人一人の学習状況を把握することに努めず、一人一人に応じた指導を展開できない。
子どもとのコミュニケーション	子どもの発達段階を考慮して、子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	子どもの発達段階を考慮して、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができない。
教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーション	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを積極的に図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を欠かさず行うとともに、適切に受け答えをすることができる。	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。	上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。	上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うことができない。
社会人マナー	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に望んでいる。	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）をある程度身に付け実習に望んでいる。	挨拶程度のマナーしか身に付けていないが、学ぼうと努力している。	挨拶などのマナーが、全く身に付いていない。
実習の態度	先生方のアドバイスや実習生の意見に謙虚に耳を傾け、協力して、自ら率先して仕事に取り組んでいる。	先生方のアドバイスや実習生の意見に耳を傾け、協力して、仕事に取り組んでいる。	先生方や実習生と協力して仕事をしようとして努力している。	先生方や実習生と協力して仕事をすることができない。
課題探究	教育者になるに当たっての自分の課題を解決するともい、新たな自分の課題を見出し、学び続ける姿勢を維持している。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な計画を立てて解決に取り組んでいる。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な解決方法を模索している。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付くことができない。

(2) 学生や受入れ校等の成果

学生自身や実習生を受け入れる小学校現場、教職員、教育委員会にとって、どのような成果が期待できるかについて、整理したものが図9である。

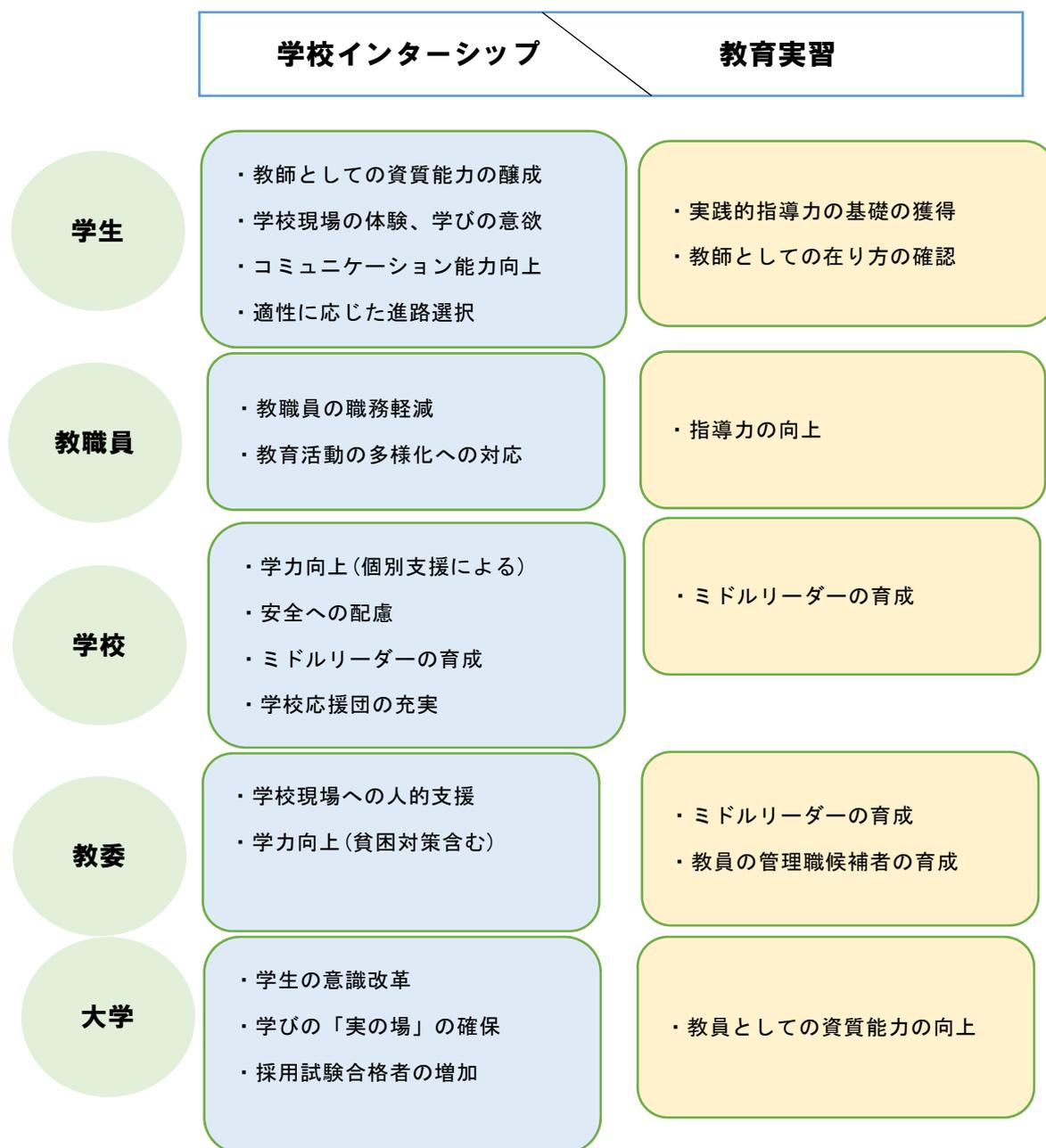


図9 学校インターンシップと教育実習を通して期待できる主な成果

例えば、学生自身にとっては、自分は教員に向いているのかどうかを考える機会となったり、実践的指導力の基礎の獲得につながったりする。学校ボランティアの学生を受け入れて指導している教職員にとっては、指導力の向上や職務の軽減になることが期待できる。学生を受け入れる学校(校長)としては、学校応援団の充実(埼玉県)や安全への配慮、個

別支援による学力向上になることが期待できる。教育委員会としては、学校現場への人的支援や学力向上(貧困対策含む)、ミドルリーダーの育成になることが期待できる。

(3) 1年次・学校インターンシップ I の成果

初めての実習体験を通して、学生は、自分自身の生活の立て直しを実践したり、大学に戻ってきてからの学習の仕方・方法等で意識的に努力したりしていくことが大きな成果である。具体的には、「小学校でのボランティアを始めた」「家庭学習時間が増えた」「新聞を切り抜き、自分の意見を書くようにしている」などの自己研鑽、「食事の仕方」「睡眠(早寝早起き、朝の大切さ、規則正しさ)」「健康管理(体力をつける、うがい、手洗い)」などの生活習慣や「時間を守ることを意識している」「TPOに気をつけるようになった」「普段の生活から気をつけるように意識している」などのセルフ・コントロールである。

また、学生は、どのような実践的指導力を身に付けたかを検討するために、平成29年3月に卒業した学生が当時1年次の2月に行った学校インターンシップ I を通して、何を学び、その学びは、その後の学校インターンシップにどのような影響を及ぼしたのか等、実習後のレポートから検討した(図10、11)。

ア) 学生 I.S.の学びと今後の課題としたこと

1) 実習における目標・課題

(略)

2) 実習を通して学んだこと

私が学んだことの1点目は、教室の中だけではなく、子どもと校庭で遊ぶ中でも、短い時間でたくさんの成長を感じることができるということだ。2月7日の金曜日の朝に体力づくり運動と呼ばれる時間があり、校庭で縄跳びの八の字跳びをした。その際に私は縄を回していたが、跳べる子どもは5人に1人ほどで少ないように感じた。その日の昼休みに子どもらと縄跳びをしようということになり、校庭で八の字跳びをした。そこで、跳べない子どもには縄に入るタイミングが分かるように、みんなでかけ声をかけながら練習をすると、子どもらはみんな朝とは見ちがえるほどに跳ぶのが上手くなり、5人に4人は跳べるようになっていた。15分程度の練習だったが、とても子どもらの成長を感じることができた。①

2点目は子どもの成長の喜びを身近で感じることができ、分かち合えることだ。1つ目の続きになるが、八の字跳びをしている際に、跳べたのがよほど嬉しかったらしく、飛び跳ねて喜んでいた子どもがいた。その子どもは、朝の段階ではうまく縄に入れず、跳べていなかった子どもだった。昼休みの終わりのチャイムが鳴り、教室に戻る際に「〇〇君すごい！縄跳び上手に跳べたね！」と声をかけると、その子どもから「僕初めて跳べた！」と返ってきた。私はなんだかとても嬉しくなり、自然とハイタッチをしていた。帰りの会が終わり、子どもらに声をかけていると、先ほどの子どもが近づいてきて「先生！僕初めて跳べて嬉しかった！」と言ってきたので、私も「先生も〇〇君が跳べてすごく嬉しいよ。また一緒に縄跳びの練習しようね」と声をかけた。このように、子どもと喜びを分かち合えることはとても素晴らしいことだと思う。私自身とても嬉しかった。②

3) 実習を終えての反省と今後の課題

(略)

今後は、先生という立場にたった接し方をもっと身に付けなければならないと感じた。また、私自身まだ勉強を教えることに関しての能力が低いということも感じたので、ボランティアなどで子ども達とふれあえる機会を通して、子ども達とたくさんコミュニケーションを取り、子ども達と良い関係を築いて行けるような接し方や、子ども達に伝わりやすい話し方を身に付けていきたいと思う。③

今回の学校インターンシップで私の良い点と悪い点を知ることができた。今よりも様々なことに興味や関心を持ち、幅広い知識を身に付けることが改めて必要だと分かった。今回学んだことを活かし、今後さらに自己成長していけるよう勉学に励んでいきたい。

図10 学生 I.S.の学校インターンシップ I のレポート

彼は、学びの一点目、下線①に縄跳び練習の例を挙げ、コツを覚えた児童が次々と上達していく様子から児童の成長の速さを実感したと述べている。二点目、下線②で、縄跳びが上達した児童との会話を挙げ、児童と喜びを共有する指導者としての喜びを挙げている。今後の課題としたのは、児童と親しくなり過ぎた反省から、「先生」としての自分と児童との関係性を築く必要があることを、下線③で述べている。

イ) 学生 O.H.の学びと今後の課題にしたこと

彼女は、学校インターンシップ I の実習で1年生を担当した。下線①で、簡単に解ける問題でも教え方が分からなかったとの反省から、児童が興味を持って学ぶ指導方法を学ぶ必要があることを述べている。また、下線②では、休み時間に「授業中とは全く違う表情を見せてくる児童も多くいた」ことに気付き、休み時間に一緒に過ごすコミュニケーションの重要性に気付いたことを述べている。今後の課題として、下線③で、指導方法と共に幅広い知識を持つため、様々なことに興味を持ち積極的に調べていく必要があることを述べている。

1) 実習における目標・課題

(略)

2) 実習を通して学んだこと

実習に行く前は、担当したクラスが1年生だったこともあり、子どもが理解できていない問題をしっかりわかるように教えてあげられると思っていた。しかし実際に教えようとしたとき、どのように教えればいいのかかわからず、子どもが理解しづらい教え方になってしまった。このことから、簡単に解ける問題でも教え方を知らなければ意味がないということを学ぶことができた^①。また、教頭先生に「子どもが授業に集中しないのは子どもが悪いのではなく、つまらない授業をしている教師が悪い。」と教えていただいた。その言葉を聞いて、私は教師になるまでに、どのように教えたら子どもが興味を持ち、理解もできるのかも考えていかなければならないと思った。

休み時間には子どもとたくさんコミュニケーションをとることができ、目標の1つであった『子どもがどのようなことに興味・関心をもつのか』ということなど、子どもひとりひとりのことを知ることができた。授業中とは全く違う表情を見せてくれる子どもも多くいたため、実際に教師になってからも、時には子どもと一緒に休み時間を過ごすことも重要なことの1つだと感じた^②。また、子どもとのふれあい以外に、雪かきや校庭の手入れ、倉庫の片付けなどもさせていただいた。これらは日常生活では経験しないような重労働が多く、子どもが快適に過ごせる環境を作ることもまた教師の重要な仕事であるということと、その大変さを知ることが出来た。

3) 実習を終えての反省と今後の課題

今回は初めての实習ということもあり、実習前に課題が見えていなかったり、実習中には勉強が足りていなかったと感じる場面が多くあった。授業でいえば、教え方や子どもに教えられるほどの幅広い知識を身につけていないことを実感した。幅広い知識に関しては、自分自身がさまざまなことに興味を持ち、積極的に調べていかなければ身につかないことだと思うため、今から意識していく必要があると考える^③。

(略)

図 11 学生 O.H.の学校インターンシップ I のレポート

以上、学校インターンシップ I を通じて、自身を振り返り、その後の課題を明確にしていることが読み取れる。さらに、この事がその後の学校ボランティア参加への起爆剤となり意欲的に学んでいったことがうかがえる。

(4) 2 年次・学校インターンシップⅡの成果

障がいのある児童に対して適切な指導及び支援を行うために、どのような教室環境を整備していくのか、授業ではどのような工夫をしていくのか、周りの児童をどのようにして支援していくのか、個別の教育支援計画はどのするのか、障がいのある児童に対する校内支援体制はどのようになっているのか等、通常学級や特別支援学級での支援のあり方を、実習を通して学ぶことが中心である。

ここでは、学生 N.O. の学びの成果を紹介する（図 12）。

<p>1) 実習時の私の目標と課題 私が立てた目標は、障がいのある子どもと多く触れ合い、コミュニケーションの仕方を考えるということである。その目標を達成するために、わかりやすい指示をし、どの子どもにも積極的に話しかけることを実習中の課題とした。</p> <p>2) 実習を終えての反省と課題 反省点としては、障がいのある子どもがブロックを片付けていたとき、投げて片付けている子がいた。<u>私は「ブロック投げちゃだめだよ」と注意したら、その子どもは泣いてしまった。子どもにとっては、普通に片付けていただけなのに、私が投げて片付けていると、誤解をしたことがその子どもを泣かせてしまった原因であった。「投げたらだめ」と言うのではなく、「かごまでブロックを持っていこうね」という言い方をすれば、その子が傷つくことはなかったのだろう。①</u> (略)</p> <p>3) 実習をとおして学んだこと (略) 子どもらは、さまざまな症状があるということを学んだ。<u>1つの症状ではなく、いくつもの症状が絡み合っていることもある。ただそれを障がいだからと考えるのではなく、個性として受け止め、その個性を伸ばしていくことが教師の役目だと思う。②</u> <u>先生方からは、悪いことには「バツ」、良いことには「マル」を手で作り、子どもの目の前で見せるという視覚的な指導方法を学んだ。他にも教室の床に数字のシールが貼ってあった。それは清掃のとき、床拭きをする順番の目印だった。障がいのある子どもにとってわかりやすく指導するためには、指導方法の発想の豊かさが必要だと感じた。③</u></p> <p>4) 学んだことを通常学級で生かすには 実習中にこれは通常学級でも起こるのではないかと思えることがいくつもあった。例えば、喧嘩などの問題発生した時に、ただ叱るのではなく、なぜそうなったのかを、時間がかかっても子どもの口から最後まで理由が言えるまで聞くという姿勢が必要である。また、理由を言ってくれたら、そのことに対して褒めてあげる。もし悪いこともしていたら、どうしていけないのか納得のいくように説明する。<u>こうした指導は、教師と子どものお互いが意思を伝え合うことで、信頼のある人間関係作りあげていく上で、通常学級でも大切な考え方であると感じた。④</u></p>

図 12 学生 N.O. の学校インターンシップⅡのレポート

彼女は、下線①で、障がいのある児童と多く触れ合い、コミュニケーションの仕方の重要性に気づいている。また、下線②、③では、障がいのある児童への支援や指導方法の教師の工夫の重要性に気づいている。下線④では、特別支援学級での学びを通常学級で生かすという視点で、教師と児童との信頼関係づくりの重要性を学び取っている。

また、多くの学生は、知識面では、様々な障がいの知識を深めること、学習指導面では、分かりやすく丁寧な支援を考えてみることに、生徒指導面では、その日に注意してみる担当児童だけでなく、児童全体の様子に目を向けるということを今後の課題として掲げている。このように学校インターンシップⅡの実習を通して、障がいのある児童への対応や特別な配慮を要する児童への指導について教師の立場になって考えることの必要感を持ち、今後の実践的指導力を身に付ける学びにつながっている。

(5) 3年次・学校インターンシップⅢの成果

平成 29 年度に実施した学生へのアンケート調査結果から、以下のことが明らかになった(表 2)。

表 2 学校インターンシップを通して向上したこと

(n = 31, 複数回答)

(自己評価)指標 → 向上したと思われるもの	人	%
ア 小学校教師を目指す者としての誇りと責任をもち、子どもたちや保護者、社会が寄せる信頼と期待を具体的に理解している。	11人	35.5%
イ 学校における教育活動の様々な場面において、基本的な法令を元にして行動することの重要性を理解している。	6人	19.4%
ウ 保護者や地域(学校応援団など)との連携・協力の重要性を理解している。	14人	45.2%
エ 子どもの理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得している。	13人	41.9%
オ 学級集団づくりのために必要な基礎理論・知識を習得している。	9人	29.0%
カ カウンセリングマインドや教育相談的手法をもとに、子ども一人ひとりの特性や状況に応じた理解ができる基礎的技能を身に付けることができた。	5人	16.1%
キ 小学校学習指導要領や教科書の内容に係る基礎理論・知識を習得している。	3人	9.7%
ク ICT(情報通信技術)の活用に係る基礎理論・知識を習得している。	4人	12.9%
ケ 特別支援教育に係る基礎理論・知識を習得している。	6人	19.4%
コ 子どもの発達段階や実態、状況に応じた学級経営案を作成する方法を理解している	2人	6.5%
サ 教材研究を生かした授業を構想し、子どもの反応を想定した学習指導案としてまとめることができる。	6人	19.4%
シ 発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	11人	35.5%
ス 授業力向上のための PDCA サイクルを理解し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けている。	0	0
セ 子ども一人一人の学習状況を把握し、個に応じた指導をすることができる。	16人	51.6%
ソ 子どもたちの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。	20人	64.5%
タ 上司や同僚に、適切に報告・連絡・相談をしたり、保護者や地域住民からの相談に対処したりできる能力を身に付けている。	7人	22.6%
チ 挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けている。	24人	77.4%
ツ 上司や同僚、他の職員の意見やアドバイスに耳を傾け、積極的に学ぼうとしている。	20人	64.5%
テ 自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢を持っている。	19人	61.3%

まず、教職に対する責任感の視点から見ると、「小学校教師を目指す者としての誇りと責任をもち、児童や保護者、社会が寄せる信頼と期待を具体的に理解できた」では、4割弱の学生が向上したと回答している。このことは、教育者としての使命感や責任感への意識の向上に関する効果がある程度認められる。

次に、総合的な人間力の視点から見ると、「挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けることができた」では、8割弱の

学生が向上したと回答している。そして、自己評価指標「上司や同僚等(学校の先生方)の意見やアドバイスに耳を傾け、理解や協力を得て課題解決に取り組むことができた」でも、6割程度の学生が、「保護者や地域(学校応援団など)との連携・協力の重要性を理解できた」では、4割程度の学生が向上したと回答している。これらのことから、大学の授業では指導が難しい社会人として必要な基本的なマナーや教職員とのコミュニケーション能力などを身に付けることにある程度の効果が認められる。しかし、学校は組織として児童の教育にあたっていく上で重要な資質能力の一つである上司や同僚との適切な「報告・連絡・相談」を身に付けることができていない点が問題である。この要因として、学生は、ボランティア校から指示された内容を行ったり、教員と十分に話をする時間的な環境がなく、教員との人間関係が不十分であったりすることが考えられる。この点について、学校ボランティアに関する大学での指導を強化していく必要がある。

また、専門職としての高度な知識・技能の視点から見ると、学習指導力では、自己評価指標「子どもの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり相談に乗ったりするなど、親しみを持った態度で接することができた」では、6割程度、自己評価指標「発問、話し方など、授業を行う上での指導技術を身に付けることができた」では、3割程度の学生が向上したと回答している。これらのことから、児童に対するコミュニケーション力や児童への個別指導の技術に関する効果が期待できる。一方、表2から各教科の学習指導の方法に関する基礎理論・知識や特性に応じた指導技術や生徒指導、学級経営等を的確に実践できる力等を、学校ボランティアを通して身に付けることは難しい状況が見えてくる。教育実習と違い、学生は、ボランティアを通して何を学ぶのかといった目的意識が明確でなく「お手伝い」という感覚でボランティアを行っているためではないかと推測できる。今後、大学での事前・実習中・事後指導で教科指導、生徒指導、学級経営を学べるような指導の工夫していく必要がある。

最後に、自己評価指標「自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、学び続ける姿勢を持つことができた」では、6割の学生が向上したと回答している。このことから、「教員は学び続ける存在である」という意識を身に付けるのに、学校ボランティアは効果が期待できる。

(6) 4年次・教職インターンシップの成果

教職インターンシップを通して、学生は、どのような学びをしているのかを、事例を通して検討した。また、検討する視点として、一人一人の学生が教科・領域に関する教材研究の仕方や指導技術等（発問の仕方、効果的な板書、わかりやすい説明等）の中から重点的に取り組みたい課題を挙げ、それを解決するための目標の達成状況や実践的指導力として学生が身に付けていっているのかを検討した。

学生 A.M.は、T小学校で、週1回程度3か月間の教職インターンシップを実施した。配

属クラスは、4年5組であり、S教諭の下、道徳について実習を行った。

彼女の目標は3つである（図13）。どの目標も具体的な内容になっている。そして、目標に関する彼女の学びは、概ねよいと判断できる。例えば、目標2「道徳の授業の組み立て方を学ぶ」では、1単位時間の道徳の授業の組み立て方を、「正直」という道徳的価値を例にしてわかりやすく整理している（下線①）。また、目標3「板書方法について学ぶ」では、道徳の授業の板書は、一般的に縦書きであるが、この指導教員は、横書きの板書を活用し、その板書のメリットを自分なりに考えている（下線②）。

学生 A.M.が行っている学びも、小学校教員として必要な授業実践の力が身に付いていくという点では成果が上がっていると考えられる。

目標1：考え、議論する子どもの育て方について学ぶ。

<学びの内容等>

ソーシャルスキルトレーニングの活用をする。（中略）

目標2：道徳の授業の組み立て方を学ぶ。

<学びの内容等>

まず、道徳的価値の項目を自分の言葉でかみ砕いてみる。例えば、「正直」という価値を自分の言葉で言い換えてみる。そして、その価値について、具体的にどういう子どもを育てていきたいのかを考え、本時のねらいを自分の言葉で考える。次に、本時の中心となる発問を考え、どこで子どもをゆさぶるか、どこで時間をとるかを考えること。そして、中心発問の前後の発問を考えて、全体の展開をイメージしてみる。最後に、補助発問を考え、本時のねらいに即しているかどうかをチェックする①。

目標3：板書方法について学ぶ。

<学びの内容等>

道徳の授業の板書は、多くが縦書きである。この先生の授業は、横書きの板書である。縦書きのメリットは、主人公の気持ちになって考える場合はよい。横書きのメリットは、子どもの気持ちを対比させたり、自分の考えを書き込んだりできる②。

図13 学生 A.M.の目標と学び

第5章 大学による学生に対する事前及び事後の指導

岡野 雅一・高橋 敏・瀧澤 重博・石浜 悦子

ここでは、学生に対して実習日誌等を利用した個人カルテを開発し、それを使った事前・実習中・事後の指導について検討した。また、事前及び事後の指導の問題点を洗い出し、それをどのように解決していったのかについても述べる。

5.1 事前・事後指導の実際

(1) 社会人としての基本的なマナーに係る指導事項

学校現場実習では、教職に必要な専門性に加え、挨拶、言葉遣い、服装など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けていることや積極的に学ぼうとする姿勢が求められる。特に、学校現場から大学に報告がある学生の問題行動は、社会人としての基本的なマナーの欠如に関する内容が多くを占める。そこで、学校インターンシップや教育実習等、学校現場実習の際には次のような点を事前に指導している。

①実習に際して

- 仕事の間（研修の間）であることを忘れずに常に謙虚に学ぶ姿勢を心がける。
- 礼儀正しく、気持ちのよい挨拶で、素早い行動と細かな気遣い。
- 時間厳守の5分前行動と、報告・連絡・相談（ほうれんそう）を心がける。
- 実習先で知り得た秘密を他人に漏らしてはならない。

（地方公務員法 32 条～37 条を理解しておく）

②服装や持ち物

1) 服装

- 「学ばせていただいている姿」で派手な服装は慎む。
- 男性はスーツ（スーツに準じたクールビズで可）。女性は男性に準じた服装。
- 教師を目指す学生にふさわしい髪色、髪型等をこころがける。
- 服飾品（ネックレス・ピアス・指輪・マニキュア等）は慎む。
- 業務の内容によっては、着替えて体育着でも可。（指示を仰ぐ）

2) 持ち物

- 名札
- 筆記用具・ノート
- メモ帳：指示を受けた時すぐにメモが取れるように。

※特に研修会等に参加した場合は、大学に戻って内容の説明ができるくらいにメモを取る。

3) 実習先の方々（児童及び指導主事や先生方等）との接し方

- ハラスメント（セクハラ・パワハラ）は事前に資料を読み、防止に努める。

- 自分が学ばせていただく立場であることを忘れない。
- 活動で不明な点があれば、遠慮せず聞くように心がける。
- 教育センターの指導主事は、現場の先生方を指導する立場にあることを忘れない。

③サービスについて

1) 勤務

- 礼儀正しく、気持ちのよい挨拶で、素早い行動と細かな気遣い。
- 出勤時刻に間に合うよう、余裕を持って出勤する。
- 自分が「仕事」に参加していることを自覚し、休んだりせぬよう体調管理をする。
- 「何かお手伝いすることはありますか」の姿勢と問いかけが基本。

2) 退勤

- 担当の方（担当の先生）の指示に従う。
- 退勤時刻は、実習先の勤務終了時刻であるが、特別な場合には指示に従う。
- 退勤時には「これで帰らせていただいてよろしいでしょうか」を聞き挨拶してから退勤する。

3) 事情があって休む場合

- 休む際には実習先の責任者（校長等）に理由を報告する。
- 次に行った時には、お詫びの挨拶をする。

4) 相談ごとがある時

- 実習先の方々（担当の先生方）に相談するのが基本。
- やむを得ない場合は教員・保育士養成センターへ。

④その他

- 「教師」としての信用を失墜する行為は、厳に慎む。体罰は、絶対に加えてはならない。
- 貴重品は、自分で責任を持って保管すること。
- 許可なしに家庭訪問をしたり、児童・生徒を自宅に訪問させたり、校外に連れ出ししたりしてはならない。
- 携帯電話はマナーモードに設定し、必要以外使用しない。
- 児童・生徒とのアドレス交換は厳禁。
- 埼玉県内の公立学校では敷地内全面禁煙。学校周辺での喫煙や「歩きタバコ」も慎むこと。

(2) 1年次・学校インターンシップ I

1年次の学校インターンシップは、学校で教師の仕事を観察し、手伝い、児童と触れ合うことにより、教師の仕事を理解することや、小学校の教師を目指す為に、今後、自分が学ばねばならないことを自覚することを目標としている。

大学での講義や演習とは異なり、現場で学ぶ機会である。そこでは、教師としての自覚が求められる。服装、態度、言葉遣い等においても、学校現場では、学生ではなく教育公務員としての自覚をもつことが欠かせない。

さらに、教師の仕事を観察し、職務内容について理解する機会でもある。授業はもちろんのこと、朝の校庭整備や安全指導、教室環境の整備や様々な場所の環境整備、学級事務、生徒指導、給食指導、清掃指導等、教師の仕事を幅広く観察し、手伝い等を行うことにより、教職につくに当たっての自分自身の課題を明確にすることが、教職につくに当たっての心構えを作ることに繋がる。

また、学校現場での学びは、豊かな人間性や社会性、常識と教養、礼儀作法をはじめ対人関係能力、コミュニケーション能力などの人格的資質を養う上でも有効であると受け止めている。このような総合的な人間力は、1年次から社会に出ることで、重点的に学ばせたい事項でもある。

このような考えのもと、学校インターンシップⅠでは、次の内容について、事前指導を行っている。

<事前指導>

① 1年次の学校現場実習の意義と目標について

- ・教員には、実践的指導力が求められる。実践的指導力を身に付けるためには、大学内での学びだけではなく、現場と大学との往還的な学びが必要である。
- ・学校の先生と言う立場で、若さの特性を生かして、児童と触れ合ったり、教師の仕事を間近に観察したりすることで、自分自身の課題を明確にし、自分が教職につくまでに何を学ばなければならないのかを明らかにする。
- ・社会人としてのルールやマナーを身に付けるとともに、教職員と円滑にコミュニケーションをとれるようにする。

② 社会人としてのルールやマナーについて

- ・教師としてふさわしい態度、行動、言葉遣い、挨拶、服装等

③ 児童と出会う際の心構え、態度について

- ・児童とふれ合い、児童の実態を知る、児童を見つめ、理解するとは、単に眺めていることだけではない。児童はどんなことで話しかけてくるか、どのように児童に働きかけたり、話しかけたりしたらよいか、こんなふうに働きかけたら、児童がのってきた、信頼をよせてきたなど。

④ 学校現場で何を観察するのか等、学びの視点を明確にすることについて

- ・学校、教職員の日を知り、先生方から学ぶ。学校のすべての仕事を積極的に引き受けるなどを通して。教師の児童への働きかけ方、どんな仕事があるか、どのように対処しているか、どんなことに注意しているか、配慮しているかなどを学ぶ。
- ・観察記録では、よいと思ったこと、学ぶべきこと、「これはちょっと」と思ったこと、

自分ならこうするという考え方を忘れないうちにまとめておくようにする。

<小学校現場にお願いしている実習内容>

- 始業前・休み時間・放課後における遊び支援
- 登下校時の安全指導の補助
- 安全点検・環境整備の補助
校内各所、遊具・固定施設など／掲示物の掲示作業／図書室の図書整理など
- 給食指導・清掃指導の支援
給食の準備や後片付け／食器・食缶運びなど
- 授業準備・片付け補助
体育の授業の前後、生活科や総合的な学習の時間の前後、プリントの印刷や配布・収集
- 学習活動の支援
遅れがちな児童への支援
- クラブ活動指導の補助
- その他、依頼されたこと全般

<事後指導>

- ① 実習を通して学んだこと、考えたこと、気付いたこと、これから学習し身に付けなければならないことなどについて、グループで討議しまとめる。
- ② 学校インターンシップⅠで学んだこと、まとめたことを発表し、質疑応答することを通して学びを深める。
- ③ 全体の学習を振り返り、担当教員が総評する。学生は、現場での実践を通して学んだことを今後どのように生かし、実際に教員として児童の前に立つまでの間に、どのような課題を克服すべきなのかを明確にし、今後の見通しを立てる。
- ④ 各自が作成した報告書を全員でまとめ、冊子を作成する。

(3) 2年次・学校インターンシップⅡ

2年次の学校インターンシップでは、最近、課題のある児童への適切な指導が求められている。中でも、発達障害のある児童への対応は、喫緊の課題であり、この点について、教員の指導力も問われるところである。次期学習指導要領では、総則第4において、「児童の発達の支援」が項立てされ、児童の発達を支える児童の充実や特別な配慮を要する児童への指導の必要性が求められている。

このような背景の中、養成段階において特別支援教育に係る学校インターンシップを展開することは価値あることである。学生には、大学で学んだ理論と現場での体験をもとにする往還的な学びを通して、発達障害を中心とした特別な配慮を要する児童への指導について、理解を深めるとともに実践的指導力を身に付けることが求められる。

<事前指導>

- ① 学校インターンシップⅡの授業目標、全体的な見通しについて理解する。また、特別支援教育の現場に参加するに当たって、障害者について、偏見を持たない等、どのような心構えで臨むかを考える。
- ② 障害についての考え方の変遷、障害受容、生涯の種類（知的障害、精神障害、重複障害、発達障害）について理解する。
- ③ 学校現場における特別支援教育経験者を招聘し、特別支援教育の現状、支援を要する児童、実習に際しての注意点等について話を聞き、特別支援教育の実際について理解を深める。
- ④ 特別支援教育における実習から何を学ぶかということについて、2週間の実践演習について、具体的な目標を設定する。

なお、大学から小学校に依頼している実習内容は、学校インターンシップⅠと同様であるが、学校インターンシップⅡでは、特別支援学級への配置を前提として、依頼をしている。

<事後指導>

- ① グループごとに、各自が学校で学んだことを、具体的に事例を挙げながら発表し合い、共通点や類似点、相違点および悩んだこと、疑問に思ったことなどをまとめる。
- ② 各校での事例をもとに、特別支援の取り組み、教職員の仕事の様子、体験したことの内容およびその対応から学んだことなどをまとめる。また、各学校や教員、の支援方法を比較して、共通点や類似点、相違点をまとめる。
- ③ 学校インターンシップⅠで学んだことを確認し、学校インターンシップⅡでの学びと照らし合わせ、それぞれにおける学びを確認する。
- ④ 学校インターンシップⅡ全体を通して学んだことについてまとめる。

(4) 3年次・学校インターンシップⅢ

学校インターンシップⅠにおいて、教師の仕事を観察し、手伝い、児童と触れ合うことにより、教師の仕事への理解を深める。このことを踏まえ、3年次の学校インターンシップでは、これまでの学校現場実習を通してもった自分自身の課題を意識しながら、授業方法、学級経営等について、往還的に学ぶことを目的としている。

<事前指導>

- ① 信頼される教師について
 - ・信頼される教師とは、誰に信頼されるのか。どのようなことで児童に信頼されるのか、学習指導力や学級経営など、実践的指導力が重要である。保護者に信頼されるためには、児童への指導力と適切に対応する力が大切である。教職員（職場内で）に信頼されるためには、職場内の人間関係で適切に対処する力と一人の人間としての適切な言動が大切

である。

- ・信頼されるために必要な事からは何だろう。自分なりに考え、実行しよう。今から実践的に正しく行動できるように（体で覚える、体で身につける）。5分前行動を心がける。

② 求められる教師像について

- ・児童に対する深い愛情と使命感をもった教師、児童が好き、児童への慈しみの心、児童に対する要求、職務の重要性を十分理解し、責任と誇りをもつ。また、愛情と情熱と正義感をもって児童から学び、児童とともに成長する姿勢が大切である。

③ 確かな実践的指導力をもった教師

- ・知・徳・体の調和のとれた人間を育成する。そのためには、児童一人ひとりの能力や適性を理解して指導にあたる（家庭環境なども）。各教科の学習でも、体育でも、生活指導でも。友達同士のトラブル、いじめ、引きこもり一集団の中で協調・協力していく力。
- ・人を惹きつける豊かな人間性をもった教師、趣味・特技、チームで働く力、児童への共感的理解

<具体的な指導例>

具体的な指導として、活動を「記録に残す」という指導を行っている。学校インターンシップでは、これまでの活動で得られた自分自身の課題を明確にし、課題を意識しながら活動することを大切にしている。事前指導としては、具体的には、**図 14** のような内容を指導している。

- ◎授業の仕方、学級経営の在り方を学ぶ。授業の工夫、学級経営の工夫を学ぶ。個に応じた指導の在り方を学ぶ。
- ◎自分が目指す教師像(モデル)を明確にする。人としての教師の在り方について学ぶ。
- ◎新たなボランティア先を加えることで、地域差(学校・児童・教職員)への適応能力を高める(人間関係づくりを含む)。社会人(教員)として第1歩を踏み出すための希望と自信を持つ。

図 14 学生自身が定める活動の目的例

- ① 学校インターンシップⅢの授業目標、全体的な見通しについて理解する。特に、自分の課題を明確にして臨むようにする。
- ② 学校インターンシップⅠ・Ⅱを振り返る。その際に、学校インターンシップⅠ・Ⅱの記録をもとに振り返らせ、活動中困難だったことなどについて、グループ内で話し合う。
- ③ 自分自身の課題を明確にし、ノートにまとめる。さらに、課題を具体的なものにするために、学校インターンシップにおいて、具体的にどのような場面に視点を当てて

活動するのかをまとめる

<事後指導>

学校インターンシップⅢでは、課題を明確にして活動することを大切にしているため、まずは、課題に視点をあてた活動を振り返り、各自が学んだことや新たに課題になったことなどについてまとめている。さらに、記録を整理することによって、各自の学びを全体で共有できるようにしている。

記録を整理する方法として、本学部では「学習指導」「学級経営」「その他」の3観点でまとめるように指導している。具体的には、ボランティア活動中に学んだことを記録にしたものを基に、ボランティア活動が終了した段階で、その内容を一つ一つ付箋紙に書かせ、それを3つの観点到に分類させる(図15)。3観点到で整理した付箋紙を、さらに詳細な視點から「省察」を行えるような振り返りワークシートを使用している。たとえば、「学習指導」に関する振り返りワークシートでは、ボランティア活動中に観察した内容を整理した付箋紙を、「授業の目標」「教材・教具の工夫」「指導過程(学習の流れ)」「児童の主体的活動(ICTの活用を含む)」「発問の仕方」「板書の仕方」「評価と支援」「学習規律」「その他」の項目に該当するものを分類する作業を通して、「学習指導」に関する整理を行わせる。そして、振り返り指導として、ボランティア活動中のことを想起させ、反省的な技法^{*2}を使った指導を行っている。

「学習指導」	「学級経営」	「その他」
B	A C	

図15 学校インターンシップ活動中の気付き等の整理の方法

具体的には、「学習指導」の振り返りワークシートを使い、各々が学校現場での気付き等の内容を付箋紙に書き、「教材・教具の工夫」「指導過程」「児童の主体的活動」等ごとに分類して添付する。こうしたグループごとの活動を通して、児童への指導内容が似ていて重なるものや、まったく異なったものがあることを発見する機会になっている。また、グループの話し合いを全体に発表する段階では、学校現場の多様な工夫に気づくことができている。しかし、多様な指導方法の中から、学校現場の教員がなぜその手法を選択したのかについて検討を加えるまでには至っていない。

(5) 教育実習（3・4年次）

教育実習は、学校インターンシップ、学校ボランティアにおける往還的な学びを土台に、大学での学びを確かなものにする点に価値がある。教育実習においては、教師を目指す者が直接学校教育の現場で教師の仕事を実際に体験し、今日の学校教育のあるがままの姿に接し、教師としての実践的指導力の基礎的技能を練磨するとともに、自らの決意と適性を最終的に確認することを到達目標としている。

本学においては、3年次における早期教育実習、4年次における教育実習のいずれかを履修することとしている。

<事前指導>

- ① 教師に求められる資質・能力としての教職に対する強い情熱、教育の専門家としての確かな力量、総合的な人間力とは何かを指導する。さらに、教育実習の意義と目標、教育実習の流れについて指導する。
- ② 第1週の実習から第4週の実習について、その意義を週ごとに指導する。
 - ・第1週は、観察実習が中心である。視点をもって観察すること。
 - ・第2週は、参加実習である。様々な教育活動の補助を通して、教師の指導を具体的に学ぶ。
 - ・第3週は、実習生が主体となって教育活動を行う期間である。指導教諭の指導のもと、実習生が実際の教育活動を行うことを通して、様々な指導のあり方を学ぶ。
 - ・第4週の実習の中心は、研究授業と、担任に代わって実習生が配属クラスの1日すべての教育活動を担当する全日実習である。教育実習の総まとめをする。
- ③ 教育実習生としての基本的な姿勢、心構えについて、次の点を具体的に指導する。
 - ・基本的な心得
 - ・身に付けてほしい電話のマナー
 - ・学校を訪問するときのマナー
 - ・勤務にあたって留意すること
 - ・教職員との接し方
 - ・児童の指導にあたって留意すること
 - ・緊急時の対応
- ④ 模擬授業を行い、各教科指導法で学んだことの復習をする。
- ⑤ 教育実習日誌の書き方と実習の留意点として、具体的に次のことを指導する。
 - ・事前の実習打ち合わせのポイント
 - ・実習初日の挨拶
 - ・実習最終日の挨拶
 - ・教育実習を終えて行うこと
 - ・教育実習のお礼状の書き方

<事後指導>

① 学習指導の基本的なことを整理する。

- ・ 授業を支える基本的なしつけや学習のルールについて整理する。
- ・ 基本的なしつけや学習ルールをどのように指導するか整理する。
- ・ 学習指導に関する指導技術（児童の興味・関心を高める導入方法、教材、個別指導、配慮を要する児童への指導等）について整理する。

② 学級経営の基本的なことを整理する。

- ・ いじめがあった場合の対応
- ・ 児童理解の方法
- ・ 集団指導の方法
- ・ 学級経営の方法

本学部では、以上のように学校インターンシップと教育実習とを連動させ、大学での学びを確かなものにするために、それぞれの目的に応じて事前・事後指導を行い体験の整理を行うとともに、実践的指導力の基礎について、その定着を図っている。

ただし、学校インターンシップⅠ～Ⅲ、教育実習などを通じて、自分は教員に向かないと思ったら、ほかの道へ進む必要がある。

(6) 4年次・教職インターンシップ

教職インターンシップは、連携教育委員会の中から、学生自身が得意とする、あるいは勉強したい分野に関する学習指導法を身に付けるために、ミドル・リーダー的な指導教員（それなりに優れた学習指導を身に付けた教員）と呼ばれている先生に学生を張り付けて実践的指導力を磨くことである。ミドル・リーダー的な指導教員に学生を張り付けるとは、例えば、理科の授業では、「〇〇小学校の A 先生」の指導が素晴らしいので、A 先生に理科分野の学習指導法を学びたい学生を張り付け、個別指導を受けるというようにした。もちろん、授業の基礎となる学級経営についても学ばせる必要がある。

教職インターンシップで学生に身に付けさせたい実践的指導力は、主として各教科等の特性に応じた指導方法や指導技術等（発問の仕方、効果的な板書、わかりやすい説明等）の学びを通じて、児童の実態や発達段階に応じた効果的な指導をするための具体的な方法を見極め獲得することである。

<事前指導>

これまでの教育実習の研究授業等とはねらいが異なる。教育実習は、先生方の授業を観察し、参考にして授業をつくりあげ、研究授業を行うことが主な学びでした。しかし、教職インターンシップのねらいは、学生自身が教材研究を通して、授業を創り上げ、実践し、その授業の反省を通して授業や授業技術（児童の興味・関心や意欲を高める導入の仕方、教材研究の方法、個別指導の在り方、指導を要する児童への配慮の仕方等）を改善してい

く力を身に付けようとするものです。

つまり、学生自身が教材研究をして、教材に対する自身の考えを持ち、どのような計画を立て、具体的に指導するのか、指導後の改善策はどうあればいいのか、その思考過程を学ぶことにより、「成長する教師」となる手法を身に付けることが目的です。

具体的例を挙げると、学生は実習校指導教諭が実践する単元の教材研究をして授業参観をする。その際、事前の教材研究をもとにして、自身が授業をする授業者の視点で授業を参観し、その後、授業者の視点で気付いたこと、疑問点などについて実習校指導教諭と話し合い、指導を受けます。その内容をレポートすることで、自身の考えを振り返る。ここでは、この「振り返る行為」に気付かせるように指導することが重要である。振り返りの思考過程での実感が自身の実践を改善する力の基礎となる。

目標設定では（図 16）、学生自身が自分の実践的指導力に関する課題をもって定期的に通う教職インターンシップであるため、自らの課題だけでなく、自分の優れている点をさらに伸ばしていくという視点からも目標を設定させた。教員養成の初期段階である点を考えると、自分の優れている点を焦点化した目標を設定させることが特に重要であると考えている。

1 希望する実習の概要

事前に文部科学省サイト「道徳教育のアーカイブ」の映像資料などを参照して実習目標について学び整理しておく。

学校では、道徳の授業を期間中2回参観させていただき、ビデオ（又はICレコーダー）で授業記録を取り、次の回までに記録を文書化して、疑問点や、自身が授業をする場合の案を書き込み、担当教諭と話し合い学ぶ。

上記の計画が終了次第、1時間の研究授業を行い、実習目標達成の成果を検証するとともに、実践的指導を高める。

2 実習目標(実習先で達成すべき課題)

1. 「考え議論する道徳」をつくり上げるためには、どのような学習過程が有効なのかを事前に調べ、学び、実践する。
2. 「考え議論する道徳」の中心発問や補助発問の設定の仕方を学び、実践する。
3. 「考え議論する道徳」の具体的な指導技術、及び学級経営の在り方を学び、実践する。

3 プログラム事前計画及び内容詳細(実習計画の詳細)

○月○日 打ち合わせ 計画の説明と調整
○月○日○時間目 5年2組授業参観 道徳「 」録音
○月○日 時 分～ 時 分 会議室で実習校指導教諭と話し合い
○月○日 前回話し合った内容をレポートにして、センター教員と話し合い
○月○日 時間目 5年2組授業参観 道徳「 」ビデオ撮り
○月○日 時 分～ 時 分 会議室で実習校指導教諭と話し合い
○月○日 前回話し合った内容をレポートにしてセンター教員と話し合い
○月 日 研究授業(大学指導教員参観)と話し合い
○月 日 改善計画レポートの提出
○月 日 全体の反省、お礼

【自身の目標】

質問 あなたが学校インターンシップを通じて達成したい目標と実践したいことは何ですか。

目標（学校インターンシップを通して学びたいことや身につけたいこと）	
教科特性に関すること インターンシップで学びたいこと	自己課題に関すること 教壇に立つ自分が課題としていること
1. 「考え議論する道徳」の学習過程について 2. 「考え議論する道徳」の中心発問や補助発問について 3. 「考え議論する道徳」の具体的な指導技術及び学級経営の在り方について	○明確な指示・説明・発問 ○構造的な板書技術 ○教材研究の方法
実践したいこと（目標を達成するために、具体的に行いたいこと）	学校担当者と話し合って、実践できること
○「考え議論する道徳」に関する道徳授業を2回参観させていただきたい。 ○授業をビデオ、又はICレコーダーで記録させていただきたい。 ○記録をもとに、2回、話合いの時間を設けていただきたい。 ○学んだことをもとに、道徳の研究授業と協議会を1回実施させていただきたい。	○参観は1回 ○話合いも1回 ○研究授業、協議会1回

図 16 教職インターンシップ目標

<実習中指導>

受け入れ小学校長に依頼し、今後、学校現場においてミドル・リーダーとして活躍が期待できるような教員を教職インターンシップ学生の指導教員に充てていただいた。そして、教職インターンシップ実習日ごとに指導教員から学生に直接指導をしていただけるようにした。

また、教員・保育士養成支援センター特任教員や専任教員が複数回実習校を訪問し、学生のインターンシップ実施状況や学校の意向、学生への省察に関する指導を行った。特に、留意した点は、学生が論理的に整理された知識と実践との関係についての省察を深めていくための指導教員とのコミットを図るシステムづくりをすることである。ここで言う指導教員とのコミットとは、小学校の指導教員が児童を指導している背景にある論理的に整理された知識に関する内容について、指導教員から直接学生が指導を受けることを意味する。たとえば、指導教員から学習指導案や研究資料などの解説を受けたり、チームティーチングによる授業や研究授業を実施したりした際に指導教員から授業実践に関する振り返る

場を設けてもらったりすることである。

特に、経験学習を行う際に、各プロセスを単に遂行するのではなく、将来的に自身はどうなりたいか、そのキャリアを念頭に置くこと、すなわち、自分をメタ的な視点で見る習慣が重要であると考えている。こうした考え方を参考に、「活動中に考えたこと」「学んだことが将来どのように役立つのか」を振り返らせるメタ認知的スキルの習得をめざした教職インターンシップ活動記録を考案した（図 17）。

教職インターンシップ活動記録では、「設定した目標に対する今日の課題」には、学生一人一人が自分の今日のインターンシップを通して達成したい目標とそれを達成するための具体的な課題を書かせた。たとえば、「算数の授業で、『めあて』と『まとめ』を意識した指導を行う」といったように、教育実習のときの反省も踏まえて、より具体的な課題を設定させている。毎回、インターンシップで取り組む課題を意識させて活動を行うように指導をした。

<p>1 月 12 日 火 曜日 天 候 晴れ 出勤 8 時 15 分 退勤 17 時 20 分</p>	<p>設定した目標に対する今日の課題 ・算数の授業で、「めあて」と「まとめ」を意識した指導を行う。</p>
<p>課題に対してインターンシップ活動で学んだこと 次回の課題</p> <p>・算数の授業を行った。前回の振り返りを踏まえ、1時間の授業では、「めあて」と「まとめ」を意識した指導を行った。しかし、思うようにいかず、焦ってしまうところもあった。</p> <p>・次回の課題：授業のめあてを子どもにしっかりと意識させ、板書もして子どもにどんな能力を身に付けていくのかを明確にして授業を行う。</p>	<p>活動中に考えたこと</p> <p>・子どもの言葉で、どのようにしてまとめをしていけばよいのだろうか？</p>
<p>1日の活動を振り返って、将来教壇に立つとき、 学んだことがどのように役立つのかを整理する</p>	
<p>・1時間の授業で子どもにどのような能力を身に付けさせるかということを念頭に置いて授業を進めること。</p>	

図 17 教職インターンシップ活動記録、振り返りの書き方例

<事後指導>

4年次の教職インターンシップは、OJT（On-the-Job Training）を基本的な指導と考えている。OJTとは、一般的に「職場の上司や先輩が、部下や後輩に対し具体的な仕事を与えて、その仕事を通して、仕事に必要な知識・技術・技能・態度などを意図的・計画的・

継続的に指導し、修得させることによって全体的な業務処理能力や力量を育成する活動である」(ウィキペディア、2017.9. 21 取得)。

浅野(2009)の学校におけるOJTの効果的な進め方を参考に、本学部のOJTの指導では、マンツーマンで指導する個別指導を行ったり、大学教員や指導教諭等が気づいた時に声をかけて指導を行ったりする。たとえば、教授法についての知識やスキルや授業中の児童への柔軟な対応を学ぶことに関する検討・論議をしている場面で指導する。また、教員・保育士養成支援センター特任教員が「メンター」として、学生自らの体験をもとに公私にわたる適切な助言と指導を、直接的・間接的に支援をする。

表3 学校におけるOJTの進め方

	内 容 ・ 特 色
個別指導	<ul style="list-style-type: none"> ・学校インターンシップの活動中に、大学教員や指導教諭等が気づいた時に声をかけてマンツーマンで指導する「コーチング」。 ・計画的に実践的指導力を、自らの体験をもとに公私にわたる適切な助言と指導を行う「メンター」。
集団指導	<ul style="list-style-type: none"> ・グループとして実践的指導力に関する省察を指導する。 ・ケースメソッドやグループワークなど、さまざまな方法で指導する。

※浅野良一「学校におけるOJTの効果的な進め方」(編著)教育開発研究所(2009)

集団指導では、グループ単位で教授法についての知識やスキルや授業中の児童への柔軟な対応に関する省察を指導する。たとえば、学校での出来事(事例)について、グループ討論を繰り返しながら、将来の教員としての実践的指導力を培っていくといったケースメソッドや授業や日ごろの言動などの教育における個人の実践を、教育技術や教材研究などの視点からグループで吟味するリフレクションなど、さまざまな方法で指導する。

(7) 教育ボランティア

教師の仕事は多岐に渡り、多忙であり、様々な能力が求められる。そこで本学では正課科目カリキュラムに「淑徳教師養成塾」を加え、優れた実践的指導力をもった教師の育成を目指している。「淑徳教師養成塾」は、小学校教師を目指す学生達に、近隣市町の教育セ

ンター研修会への参加や小学校でのスクールボランティア活動を通して、学校での教師の仕事を実践的に学ぶ場を提供しようとするものである。学校インターンシップ I は、初等教育コース 1 年次学生にとっての正課科目カリキュラム上での体験実習であると共に、スクールボランティアに取り組む際の基礎知識・技能・礼儀などを身に付ける場とも言える。このように学校インターンシップ I を出発点としてスクールボランティアで体験的に学び、実践的指導力を強化していくことを狙っている。なお本学部では、学生がスクールボランティア等に積極的に参加して学ぶことができるよう、2 年次より火曜日授業に必修科目を設定せずに、火曜日のスクールボランティア活動を推奨している。

学校ボランティアの事前指導は、年度当初 4 月に 2・3 年次生を対象に行っている。学生が自身の目的を持ってスクールボランティアに取り組み、「実践的指導力」を身に付けることを重視している。事前指導では、特に、学生である甘えた言動がボランティア先学校に迷惑をかけてしまうことを回避するため、スクールボランティアに対する心構えの指導を重視している。また、学校の教職員にとっての「仕事」に真剣に関わってもらうためでもある。そのため、(1) 社会人としての基本的なマナーに係る指導事項に加え、次のような項目を指導している。

- いつでも報告できるよう、「活動記録ノート」を整理しておく。
- ボランティア保険には必ず加入する。
- ボランティア活動は原則無償である。
- 自己都合によりボランティア活動を辞退する場合は、1 週間前までにボランティア先の責任者（校長等）に連絡し、了承を得ること。
- ボランティア活動中に不適切な言動があり、活動に適さないとボランティア先の責任者（校長等）が判断した場合は、大学としてボランティア活動の即刻中止を命じる。
- ボランティア中の費用は、自己負担とする。

なお、ボランティアについては、事前指導を行った上で、学校現場で学ばせ、学んだことを学校インターンシップや教育実習に生かすように指導している。その際、学校インターンシップや教育実習で、具体的に生かせること、また、新たな自分自身の課題を明確にしたことなどについて省察させるために、「活動記録ノート」をもとに適宜指導している。

5.2 受け入れ校の負担軽減として学校インターンシップ用ルーブリックの開発

受入れ校の学校インターンシップに関する指導と評価の負担軽減の工夫として、事前に小学校に A4 判 1 枚の評価用ルーブリックを配付し、実習中の学生の評価を依頼した。また、実習中の指導については、基本的に大学側が責任をもって指導を行うようにするために、学生に小学校現場での教育活動を観察するルーブリックの活用を図った。

学校インターンシップを評価するルーブリックを開発し、事前・事後指導での目標設定と振り返り・省察の指導方法を考案する。

(1) 学校インターンシップの学びの成果測定について

①作成手順

ア) これまでに作成した教職課程カリキュラムの学修を通して育成する資質・能力一覧表（淑徳大学、平成 27 年度総合的な教師力向上のための調査研究事業報告書、p. 18）を見直す。

イ) ア) で確定したものをもとに、今後学校インターンシップのルーブリックを作成する。

②教職課程カリキュラムの学修を通して育成する資質・能力一覧表の視点

ア) 現行の項目名と指標との関連を見直し、現行の指標を適切な項目名のもとに配置する。

イ) 文部科学省による教職課程の履修カルテに示された項目との整合性を図る。

ウ) 埼玉県教委委員会作成の教員の自己評価シートに位置付けられている行動プログラム、チームワーク行動に関する着眼点を参考にする。

エ) 「専門性」「人間性」「情熱・使命感」の内容でまとめる。

(2) 学校インターンシップの学びの成果測定の活用

学校インターンシップにおける学生の学びの成果を、学生自身が自己評価したり、指導する教員が指導に役立てたりするために、図 18 のような「学校インターンシップ個人カルテ」を作成して、活用している。

		1年次	2年次	3年次	4年次
1年次 ~4年次	35 学校教育についての理解	1	3	4	5
	36 児童に対する責務	3	4	4	5
	37 教育実践力	3	3	3	3
	38 学級経営力	3	2	4	5
	39 協同・コミュニケーション力	2	2	4	5

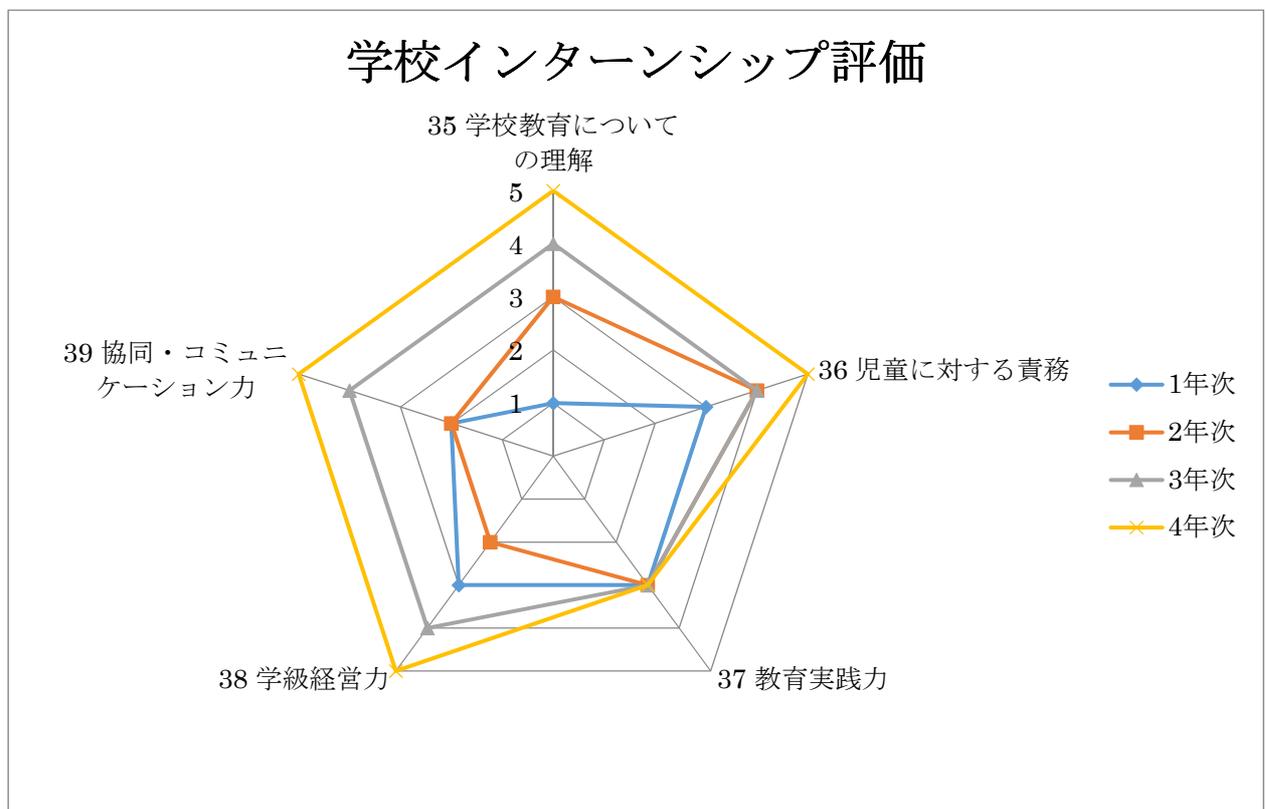
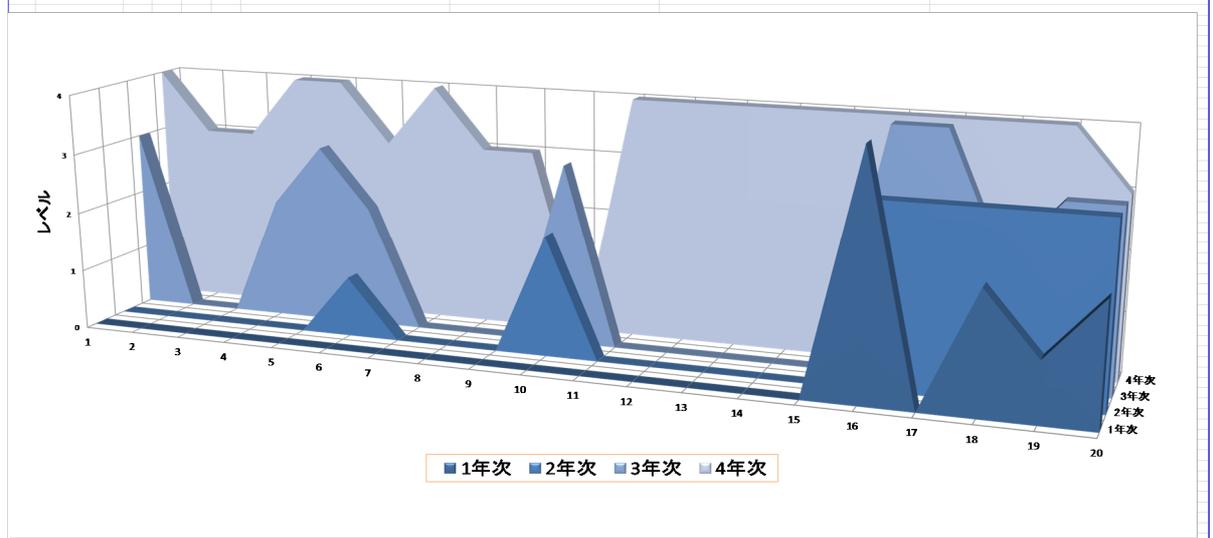


図 18 学校インターンシップ個人カルテ

学校インターンシップカルテ				学籍・氏名		17K001		淑徳 太郎	
項目タイトル	19年度	20年度	30年度	40年度	不十分 [レベル1]	努力を要する [レベル2]	標準[レベル3]	優秀[レベル4]	
1 教師としての使命感			3	4	目の前の子どもと、なかなかかかわることができない。	子ども一人一人の実態や状況を把握するために子どもとかかわっている。	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出したり伸ばしたりするために子どもとかかわっている。	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出し伸ばしたりするために子どもと積極的にかかわっている。	
2 法令を基にした理解			3	4	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、理解していない。	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、理解している。	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、法令をもとに部分的に理解している。	教職の意義や教員の役割、職務内容、子どもに対する責務について、法令をもとに理解している。	
3 保護者や地域との連携			3	4	保護者や地域住民等と連携していることを概ね理解していない。	保護者や地域住民等と連携していることを概ね理解している。	保護者や地域住民等と連携して、学校の教育力を高めていることを概ね理解している。	保護者や地域住民等と連携して、学校の教育力を高めていることを理解している。	
4 子どもについての理解			2	4	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得していない。	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を少し習得している。	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を概ね習得している。	子ども理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得している。	
5 学級集団づくり			3	4	清掃指導、給食指導の場において、なかなか指導できずにいる。	清掃指導、給食指導だけを行っている。	教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を行っている。	学級の規範づくりや教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を積極的に行っている。	
6 児童理解と教育相談	1		2	3	教師として褒めたり叱ったりすることができない。	教師として褒めることはできるが、叱ることができない。	児童一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、教師として、褒めたり叱ったりすることができる。	児童一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、状況に応じた的確な判断を行い、適切に褒めたり叱ったりする対応方法を身に付けている。	
7 学習指導要領教科書				4	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら理解することができない。	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら少し理解している。	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら理解している。	小学校学習指導要領の目標と内容を教科書に照らしながら系統性や関連性を踏まえて理解している。	
8 教材研究				3	授業の準備のための教材研究が不十分である。	授業の準備のための教材研究ができる。	学習指導要領の各教科等の目標と内容を踏まえ、授業の準備のための教材研究ができる。	学習指導要領の各教科等の目標と内容を踏まえ、授業の準備のための教材研究ができる。	
9 ICT活用				3	各教科等の授業場面において、ICTを活用する方法を理解していない。	各教科等の授業場面において、ICTを活用する方法を理解できる。	各教科等の授業場面において、ICTを効果的に活用し授業の効率を高める方法を理解することができる。	ICTの活用に関心をもち、各教科等の授業場面において、ICTを効果的に活用し授業の効率を高める方法を理解できる。	
10 特別支援教育		2	3		特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解していない。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解できる。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解するとともに、障害のある児童への対応について少し理解できる。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解するとともに、障害のある児童への対応について理解できる。	
11 学級経営				4	子どもを理解する方法、学級経営の具体的な方法を理解していない。	子どもを理解する方法、学級経営の具体的な方法の一部を理解できる。	子どもを理解する方法、学級経営の具体的な方法等について概ね理解できる。	子どもの発達段階や実態、状況に応じた子どもの理解する方法や学級経営の具体的な方法等について理解できる。	
12 学習指導案				4	授業を構想した指導案を作成することができない。	授業を構想した指導案を作成することができる。	教材研究を活かした授業を構想した指導案を作成することができる。	教材研究を活かした授業を構想し、子どもの反応を想定した指導案を作成することができる。	
13 指導技術				4	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けていない。	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術の一部しか身に付けていない。	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	子どもの反応を活かした授業を展開ができ、発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	
14 授業の反省・改善				4	授業の振り返り、成果と課題を整理することができない。	授業の振り返り、成果と課題を整理することができる。	授業の振り返り、成果と課題を整理し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けようとしている。	PDCAサイクルに基づいた授業の振り返り、成果と課題をきちんと整理し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けている。	
15 個に応じた指導				4	児童一人一人の学習状況を把握することに努めず、一人一人に応じた指導を展開できない。	児童一人一人の学習状況を把握することに努め、一人一人に応じた指導を展開しようとしている。	児童一人一人の学習状況を的確に把握し、指導の手立てを考えた上で、一人一人に応じた指導を展開している。	児童一人一人の学習状況を的確に把握し、指導の手立てを考えた上で、一人一人に応じた指導を展開し、子どもを伸ばしている。	
16 子どもとのコミュニケーション	4	3	4	4	子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができない。	子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	子どもの発達段階を考慮して、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	子どもの発達段階を考慮して、子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	
17 教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーション		3	4	4	上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うことができない。	上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを積極的に図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を欠かさず行うとともに、適切に受け答えをすることができる。	
18 社会人マナー	2	3	2	4	挨拶などのマナーが、全く身に付いていない。	挨拶程度のマナーしか身に付けていないが、学ぼうと努力している。	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）をある程度身に付け実習に望んでいる。	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に望んでいる。	
19 実習の態度	1	3	3	4	先生方や実習生と協力して仕事をすることができない。	先生方や実習生と協力して仕事をしようとする努力をしている。	先生方のアドバイスや実習生の意見に耳を傾け、協力して、仕事に取り組んでいる。	先生方のアドバイスや実習生の意見に謙虚に耳を傾け、協力して、自ら率先して仕事に取り組んでいる。	
20 課題探究	2	3	3	3	教育者になるに当たっての自分の課題に気付くことができない。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な解決方法を模索している。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な計画を立てて解決に取り組んでいる。	教育者になるに当たっての自分の課題を解決するとともに、新たな自分の課題を見出し、学び続ける姿勢を維持している。	



(2) 学校インターンシップ用ルーブリックについて

学生が目標を持って実習に取り組み、同時に自身の自己理解を図らせるために、事前指導時に次の評価表を活用して評価指標の説明を行った。また、大学側担当教員が学校に実習依頼をする際に、実習の手順・内容と共にこの評価についても説明をさせていただいた。大学評価・記入面は大学側担当教員が記入。実習校評価・記入面は学校の校長・教頭、又は学校側担当教員が記入し、厳封の上、大学に送付していただいた。

表 4 【実習校・評価記入用】学校インターンシップ I (1年次)

指標		A	B	C
【実習校評価】	【人間性】 ⑤子どもたちの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。	子どもの発達段階を考慮して、子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>	子どもの発達段階を考慮して、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>	子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>
	⑦挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けている	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に望み、他者にも認められている。 <input type="checkbox"/>	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に臨んでいる。 <input type="checkbox"/>	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）をある程度身に付け実習に臨んでいる。 <input type="checkbox"/>
	⑧上司や同僚、他の職員の意見やアドバイスを耳を傾け、積極的に学ぶようとしている。	先生方のアドバイスや実習生の意見に謙虚に耳を傾け、協力して、自ら率先して仕事に取り組んでいる。 <input type="checkbox"/>	先生方のアドバイスや実習生の意見に耳を傾け、協力して、仕事に取り組んでいる。 <input type="checkbox"/>	先生方や実習生と協力して仕事をしようと努力している。 <input type="checkbox"/>
	【情熱・使命感】 ⑨自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢をもっている ※実習活動の様子や「実習ノート」の記述内容から	教育者になるに当たっての自分の課題を解決するとともに、新たな自分の課題を見出し、学び続ける姿勢を維持している。 <input type="checkbox"/>	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な計画を立てて解決に取り組んでいる。 <input type="checkbox"/>	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な解決方法を模索している。 <input type="checkbox"/>

註) 担当の先生が指標達成度 A, B, C 何れかの口をチェック☑後、所定の封筒を使い厳封の上、学生にお渡しください。(学生の実習成績がどの項目にも達していないと判断される場合は記入しなくてもかまいません。) また、特にお気づきの点や、大学に報告すべき事などがありましたら、「連絡事項」の欄にご記入ください。どうぞ宜しくお願い致します。

表5 【実習校・評価記入用】学校インターンシップⅡ（2年次）

指 標		A	B	C	
【実習校評価】	【専門性】	③カウンセリング グマインドや教育 相談的手法をもと に、子ども一人ひ とりの特性や状況 に応じた理解がで きる基礎的技能を 身に付けている。	子ども一人一人に対応 する基本的な教育相談ス キルを身に付けようと し、状況に応じた的確な 判断を行い、効果的に 褒めたり叱ったりする 対応方法を身に付け ている。 <input type="checkbox"/>	子ども一人一人に対応 する基本的な教育相談ス キルを身に付けようと し、状況に応じた的確な 判断を行い、適切に褒め たり叱ったりする対応 方法を身に付けてい る。 <input type="checkbox"/>	子ども一人一人に対 応する基本的な教育相 談スキルを身に付けよ うとし、教師として、褒 めたり叱ったりするこ とができる。 <input type="checkbox"/>
		④特別支援教育に 係る基礎理論・知 識を習得している。	特別支援学校、特別支援 学級、通常学級におけ る特別支援教育につい て理解するとともに、 障害のある子どもへ の対応について理解で きる。 <input type="checkbox"/>	特別支援学校、特別支援 学級、通常学級におけ る特別支援教育につい て理解するとともに、 障害のある子どもへ の対応について少し理 解できる。 <input type="checkbox"/>	特別支援学校、特別支 援学級、通常学級にお ける特別支援教育につ いて理解できる。 <input type="checkbox"/>
		⑤子どもたちの発 達段階を考慮して、 積極的に声をかけ たり、相談に乗っ たりすることができる。 など、親しみをも った態度で接するこ とができる。	子どもの発達段階を考 慮して、子どもの声を 真摯に受け止め、公 平で受容的な態度で 接したり、積極的に子 どもに声をかけたり 相談に乗ったりする ことができる。 <input type="checkbox"/>	子どもの発達段階を考 慮して、公平で受容 的な態度で接したり、 積極的に子どもに声 をかけたたり相談に 乗ったりすることが できる。 <input type="checkbox"/>	子どもに声をかけ たり相談に乗ったり することができる。 <input type="checkbox"/>
		⑥上司や同僚に、 適切に報告・連絡・ 相談をしたり、保 護者や地域住民か らの相談に対処し たりできる能力を 身に付けている	教職員、保護者、地 域住民とのコミュニ ケーションを積極 的に図ったり、上 司や同僚に対して 報告、連絡、相談 を欠かさず行うと ともに、適切に 受け答えを することができる。 <input type="checkbox"/>	教職員、保護者、地 域住民とのコミュニ ケーションを積極 的に図ったり、上 司や同僚に対して 報告、連絡、相談 を行うとともに、 受け答えを することができる。 <input type="checkbox"/>	上司や同僚に対 して報告、連絡、 相談を行うと ともに、受け 答えを することができる。 <input type="checkbox"/>
【人間性】	⑦挨拶、言葉遣い、 服装、他の人への 接し方など、社会 人として求められる 基本的なマナー を身に付けている	社会人としての基本的 マナー（挨拶、言葉遣 い、電話対応、服装 等）を十分に身に付 け実習に望み、他者 にも認められてい る。 <input type="checkbox"/>	社会人としての基本的 マナー（挨拶、言葉遣 い、電話対応、服装 等）を十分に身に付 け実習に望んでい る。 <input type="checkbox"/>	社会人としての基本 的マナー（挨拶、言葉 遣い、電話対応、服 装等）をある程度 身に付け実習に望 んでいる。 <input type="checkbox"/>	

	⑧上司や同僚、他の職員の意見やアドバイスを耳を傾け、積極的に学ぼうとしている。	先生方のアドバイスや実習生の意見に謙虚に耳を傾け、協力して、自ら率先して仕事に取り組んでいる。	先生方のアドバイスや実習生の意見に耳を傾け、協力して、仕事に取り組んでいる。	先生方や実習生と協力して仕事をしようと努力している。
		<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>	<input type="checkbox"/>
【情熱・使命感】	⑨自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢をもっている ※実習活動の様子や「実習ノート」の記述内容から	教育者になるに当たっての自分の課題を解決するとともに、新たな自分の課題を見出し、学び続ける姿勢を維持している。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な計画を立てて解決に取り組んでいる。	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な解決方法を模索している。

註) 担当の先生が指標達成度 A, B, C 何れかの口をチェック☑後、所定の封筒を使い厳封の上、学生にお渡しください。(学生の実習成績がどの項目にも達していないと判断される場合は記入しなくてもかまいません。) また、特にお気づきの点や、大学に報告すべき事などがありましたら、「連絡事項」の欄にご記入ください。どうぞ宜しくお願い致します。

表6 【実習校・評価記入用】学校インターンシップⅢ（3年次）

指 標		A	B	C
【専門性】	① 小学校教師を目指す者としての誇りと責任をもち、子どもや保護者、社会が寄せる信頼と期待を具体的に理解している	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出したり伸ばしたりするために子どもと積極的にかかわっている。 <input type="checkbox"/>	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出したり伸ばしたりするために子どもとかわわっている。 <input type="checkbox"/>	子ども一人一人の実態や状況を把握するために子どもとかわわっている。 <input type="checkbox"/>
	②学級集団づくりのために必要な基礎理論・知識を習得している。	学級の規範づくりや教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を積極的に行っている。 <input type="checkbox"/>	教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を行っている。 <input type="checkbox"/>	清掃指導、給食指導だけを行っている。 <input type="checkbox"/>
	③カウンセリングガイダンスや教育相談的手法のもとに、子ども一人ひとりの特性や状況に応じた理解ができる基礎的技能を身に付けている。	子ども一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、状況に応じた的確な判断を行い、効果的に褒めたり叱ったりする対応方法を身に付けている。 <input type="checkbox"/>	子ども一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、状況に応じた的確な判断を行い、適切に褒めたり叱ったりする対応方法を身に付けている。 <input type="checkbox"/>	子ども一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、教師として、褒めたり叱ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>
	④特別支援教育に係る基礎理論・知識を習得している。	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解するとともに、障害のある子どもへの対応について理解できる。 <input type="checkbox"/>	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解するとともに、障害のある子どもへの対応について少し理解できる。 <input type="checkbox"/>	特別支援学校、特別支援学級、通常学級における特別支援教育について理解できる。 <input type="checkbox"/>
【人間性】	⑤子どもたちの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。	子どもの発達段階を考慮して、子どもの声を真摯に受け止め、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>	子どもの発達段階を考慮して、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>	子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。 <input type="checkbox"/>
	⑥上司や同僚に、適切に報告・連絡・相談をしたり、保護者や地域住民からの相談に対処したりできる能力を身に付けている	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを積極的に図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を欠かさず行うとともに、適切に受け答えをすることができる。 <input type="checkbox"/>	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。 <input type="checkbox"/>	上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。 <input type="checkbox"/>

【人間性】	⑦挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けている	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に望み、他者にも認められている。 <input type="checkbox"/>	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に望んでいる。 <input type="checkbox"/>	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）をある程度身に付け実習に望んでいる。 <input type="checkbox"/>
	⑧上司や同僚、他の職員の意見やアドバイスに耳を傾け、積極的に学ぼうとしている。	先生方のアドバイスや実習生の意見に謙虚に耳を傾け、協力して、自ら率先して仕事に取り組んでいる。 <input type="checkbox"/>	先生方のアドバイスや実習生の意見に耳を傾け、協力して、仕事に取り組んでいる。 <input type="checkbox"/>	先生方や実習生と協力して仕事をしようと努力している。 <input type="checkbox"/>
【情熱・使命感】	⑨自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢をもっている ※実習活動の様子や「実習ノート」の記述内容から。	教育者になるに当たっての自分の課題を解決するとともに、新たな自分の課題を見出し、学び続ける姿勢を維持している。 <input type="checkbox"/>	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な計画を立てて解決に取り組んでいる。 <input type="checkbox"/>	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な解決方法を模索している。 <input type="checkbox"/>

註) 担当の先生が指標達成度 A, B, C 何れかの口をチェック☑後、所定の封筒を使い厳封の上、学生にお渡しください。(学生の実習成績がどの項目にも達していないと判断される場合は記入しなくてもかまいません。) また、特にお気づきの点や、大学に報告すべき事などがありましたら、「連絡事項」の欄にご記入ください。どうぞ宜しくお願い致します。

表7 【実習校・評価記入用】教育実習

評価項目	評価の観点	評価
教師としての使命感	子ども一人一人の実態や状況を把握し、子どものよさや可能性を引き出したり伸ばしたりするために子どもと積極的にかかわっている。	
社会人マナー	社会人としての基本的マナー（挨拶、言葉遣い、電話対応、服装等）を十分に身に付け実習に望んでいる。	
子どもとのコミュニケーション	子どもの発達段階を考慮して、公平で受容的な態度で接したり、積極的に子どもに声をかけたり相談に乗ったりすることができる。	
教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーション	教職員、保護者、地域住民とのコミュニケーションを図ったり、上司や同僚に対して報告、連絡、相談を行うとともに、受け答えをすることができる。	
教材研究	学習指導要領の各教科等の目標や内容を踏まえ、授業の準備のための教材研究ができる。	
学習指導案	教材研究を生かした授業を構想した指導案を作成することができる。	
指導技術	発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	
学級集団づくり	教室の環境構成、清掃指導、給食指導等を行っている。	
児童理解と教育相談	児童一人一人に対応する基本的な教育相談スキルを身に付けようとし、状況に応じた的確な判断を行い、適切に褒めたり叱ったりする対応方法を身に付けている。	
課題探究 (実習日誌)	教育者になるに当たっての自分の課題に気付いており、具体的な計画を立てて解決に取り組んでいる。	

総合評価 A（優） B（良） C（可） D（不可）

※評価は、5：非常に優れている 4：優れている 3：普通 2：劣っている 1：非常に劣っているとして、各評価項目について、該当する評価をご記入ください。

第6章 学生側と受入れ校側のニーズやメリットの把握と情報提供のあり方

高橋 敏・内田 弘

6.1 小学校・教育委員会・大学間連携の現状と課題

学校インターンシップは大学と外部組織（学校・教育委員会・その他）との良好で継続的な関係性によって成立する学修である。そこには、それぞれの組織の立場や様々な職名の人間や、一人一人の考えや思いが介在する。例えば、学校には校長の経営方針、教育委員会には行政施策方針、大学には大学・学部運営方針がある。更に細分化すれば学校の教員、教育委員会の指導主事、大学のそれぞれの立場の教員、その一人一人の考えや思いがある。

このことを踏まえ、学校インターンシップでは、大学、学生、小学校現場がそれぞれWin-Winのような良好な相補関係を築く必要がある。そこで本稿では、相補関係組織の学校・教育委員会・大学（以下、三者と表記の場合もあり）の三者の連携について述べる。

（1）小学校・教育委員会・大学間にとっての連携の意義

小学校・教育委員会・大学間連携の意義を、本稿 1.4「学校インターンシップの基本的な考え方」、及び「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」（文部科学省・厚生労働省・経済産業省、2014）から整理する。

○大学・学生にとっての意義

大学の専門教育を一層推進することができ、学校現場での学びと大学での学びを結びつけ往還的な学びが可能となり、大学の教育内容・方法の改善・充実につながる。

学生が教職への適性を考える機会となり、主体的な学びやレベルの高い教職意識の育成が図られる。また、学校現場での実務能力を高めることは、課題解決・探求能力、実行力といった社会人として必要な能力を育成することにもなる。

○教育委員会にとっての意義

各自治体が教育行政方針に基づき、大学と連携して企画を立案、計画を推進することにより、学校インターンシップの有効活用が図られ、教育行政方針の具現化が促進される。また、将来性のある学生と関わることにより自治体独自で採用する教員などの確保にもつながる。

○小学校にとっての意義

受け入れ校においては、教員の研修機会が生まれるとともに、学校リーダーの育成や若手人材の育成にも効果がある。また、長期的視点で学校教育を見たとき、学生が学校インターンシップで得た成果は、いつか必ず学校に還元されるものである。

以上のような意義は誰もが認めるものであるが、三者の意思疎通を図り、相互理解を深めるとともに、綿密な計画の下に学校インターンシップを推進していく必要がある。

(2) 教育委員会と大学との連携の現状

本学部では、**図 19**のように近隣4市1町(川越市、所沢市、富士見市、朝霞市、三芳町)と教育連携に関する協定を結び、年2回「連絡調整会議」を実施し、連携の基本的あり方や問題点等について検討している。具体的には、学校インターンシップⅠ・Ⅱ・Ⅲ、教育実習、教職インターンシップ、教育ボランティアの受け入れの依頼やそれぞれの目的の説明等である。また、各教育委員会の要望等をうかがう場となっている。各教育委員会は、この会議を経て各実習に係る学生の受け入れ可能な学校を確認し、本学部で紹介する仕組みになっている。

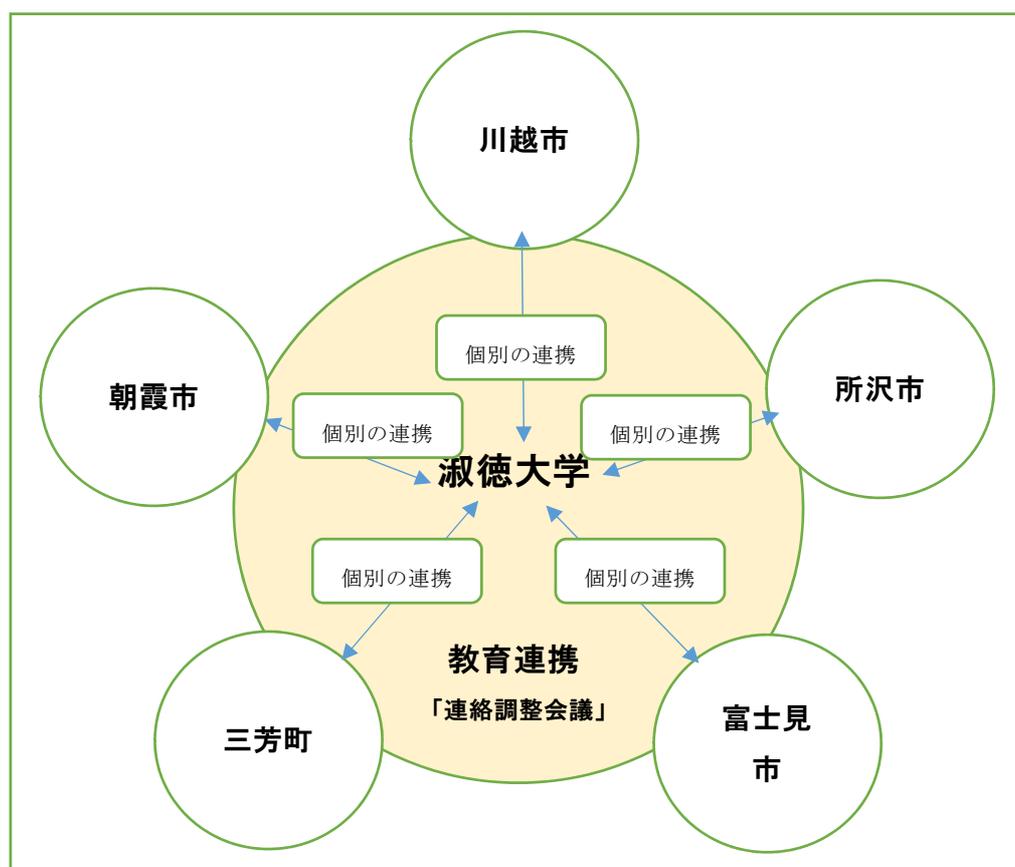


図 19 教育委員会との連携

一方、個別の連携では、連携教育委員会や団体が実施する事業に対し依頼を受け、学生に参加を呼びかけ、ボランティア活動として実施している夏季淑徳教師養成塾がある。平成29年度は、三芳町みらい&のぞみ「サマー・チャレンジ・スクール!」、朝霞市「彩夏ちゃんのサマースクール」、「富士見市夏休み宿題教室」、入間市夏季休業中の補充授業、入間市「サマーチャレンジキャンプ」等に延べ100名を超える学生が参加した。

しかし、ある教育委員会から大学との連携のために「学生を受け入れているにもかかわらず教育委員会としてのメリットが無い」とのご指摘をいただいた。そこで、他の教育委員会との連携による学生の人材活用状況を情報提供したところ、学生が中心となる活動が

教育委員会の新規事業として開催された。事業実施後の教育委員会によると、初めての事業であったが、目的を達成することができ、本学の学生に対するイメージが変わったとの報告をうけ、今後も学生が活躍する場の提供が約束された。

以上のことから、限られた時間内での「連絡調整会議」では、各教育委員会との連携活動が共通認識されない現状があるが、確かな情報提供は、教育委員会事業の充実、及び学生の活動の場の拡大を生む。今後は、各教育委員会との個別連携状況の情報提供を通じて、事業成果情報の共有化を図ることが必要である。

(3) 小学校と大学との連携の現状

学校インターンシップの現状は、概ね右図のような関係になる。学校インターンシップⅠは、学生と小学校現場との出会いに重点を置いている。そこで小学校との関係づくりができた学生や、居場所のつくれた学生は、「ここで学びたい」と考え、当該学校での**学校ボランティア**を行うようになる。そのような関係が受け入れ校との間に築けなかった場合や、学生の「学びの目的」が受け入れ校と合致せず、「他で学びたい」と学生が考えた場合は教員・保育士養成支援センターが仲介する。仲介は、**図 20** の矢印で表現されているように、学生と相談し、教育委員会を通じてや学校と直接交渉をして学生の目的に応じた活動ができる学校を紹介している。

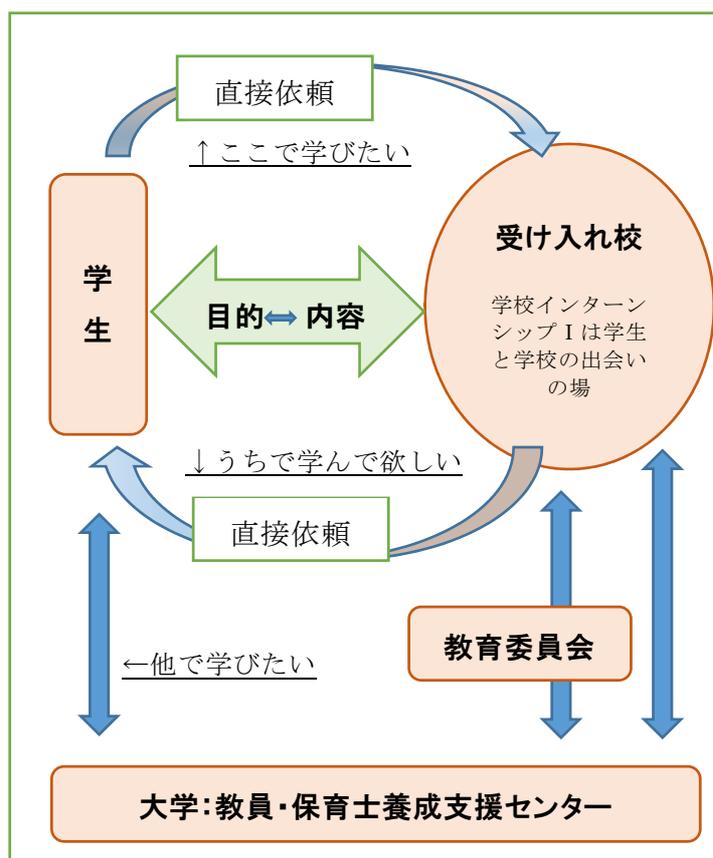


図 20 小学校との連携

しかし、現在、教員・保育士養成支援センターは、受け入れ校と直接交渉するケースが多く、小学校との一対一の関係となってしまう、教育委員会との連携が希薄になっている現状がある。また、学校インターンシップの意義を理解し、学生を積極的に受け入れ、成果を上げている小学校がある反面、学校インターンシップに扉を閉ざす小学校もある。このことから、連携する全ての教育委員会、全ての小学校が学校インターンシップの意義に基づく成果を上げるためには、今後、学校インターンシップの意義を共通に認識し、学校インターンシップ活動の成果等を小学校・教育委員会・大学が共有する場の設定が必要である。以上のような課題を解決するための試みを事項で紹介する。

6.2 小学校・教育委員会・大学間連携の試み

(1) 小学校・教育委員会・大学間の情報共有化のための試み

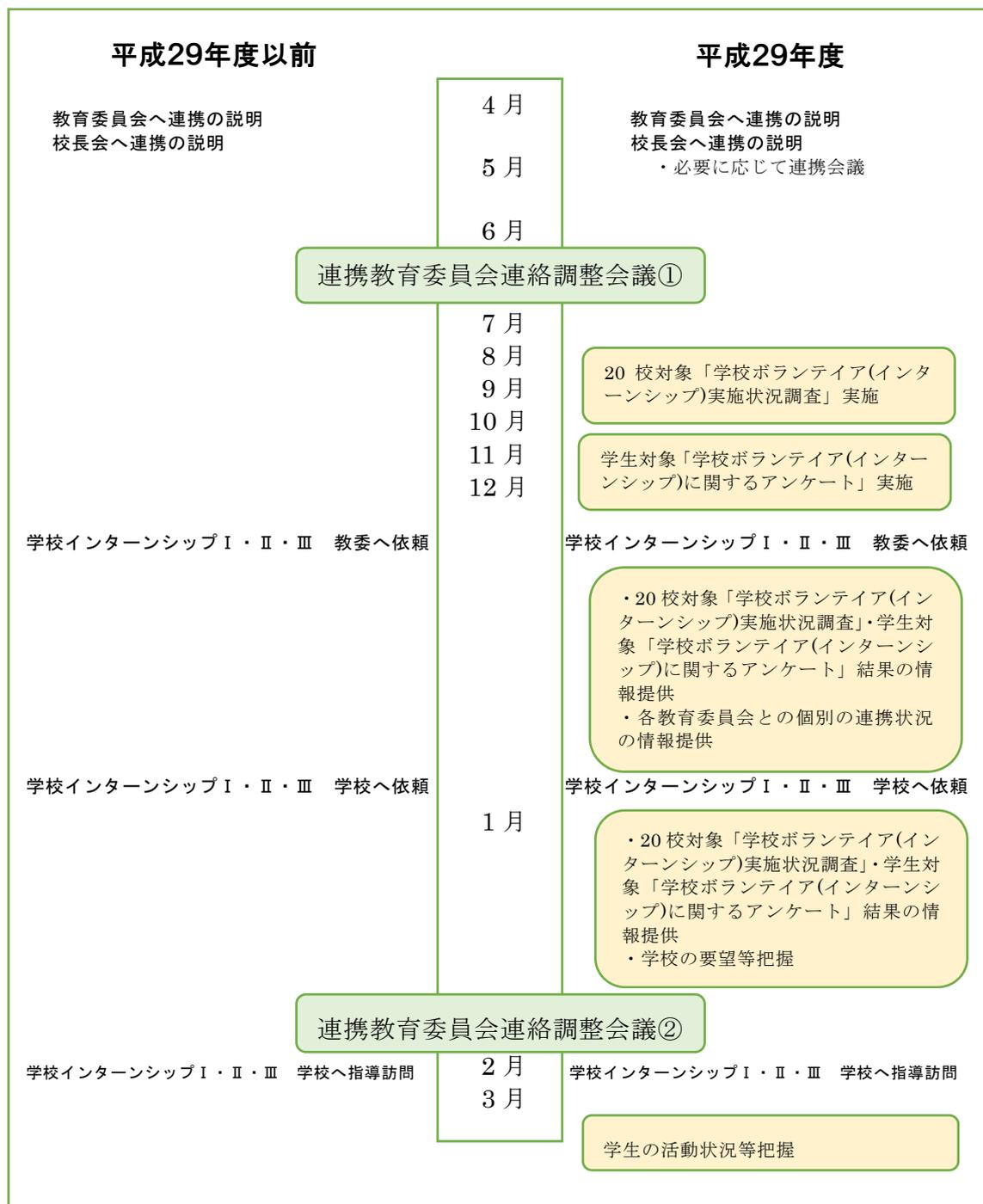


図 21 情報共有化の試み

本学部の教員・保育士養成支援センターには初等教育担当として5名の特任教員が在職している。教員の職務の一つとして、それぞれが連携市町を担当し、教育連携の実務を担っている。内容としては、教育委員会への依頼、校長会への依頼、各学校への依頼業務で、

大学の教育課程に位置づけられたインターンシップの説明や学生受け入れについての依頼が中心であった。この取り組みを、平成 29 年度は、情報共有の視点から捉え直し、実施した。図 21 のように、平成 29 年度以前の取り組みに、連携の現状・学生や受け入れ校のニーズやメリットなど、収集した情報の提供を加え、教育委員会や受け入れ校との連携の強化を図った。また、連携教育委員会は、それぞれが独立した機関であり規模や状況も異なる。そのため、大学と連携教育委員会が同席する連絡調整会議では、連携に関する基本的事項について共通認識を図り、具体的連携については、「個別の連携」で互いのニーズに応じた連携に取り組んだ。

今後は、学校・教育委員会・大学、三者による検討会議を設置し、連携のあり方について検討していく必要がある。

(2) 小学校との連携の試み

本学部では、学校ボランティアを希望する学生には、「学校ボランティア申請カード」を作成させ、受け入れ先小学校に提出することになっている。この申請カードの内容に「学校ボランティアの抱負」欄がある。本来、ここでは学生自身が学びたい内容を具体的に記せばよいのだが、具体性に欠けた内容や学校にお任せ的な内容が多い。受け入れ先の小学校から、学生が明確な目的を持って学校ボランティアに取り組むか否かによって獲得されるものは大きく異なり、学生の成長に差が出るだけでなく、指導する側の教員の意識も変わると言われる。また、小学校側は、目的が明確でない学生の指導を学校現場に丸投げするのではなく、大学としてもボランティア活動をしている学生の姿を把握し、指導すべきとの意向を持っているなど、確かに、ボランティアの体験はできるものの、学生にとって大きな学びにはならないことがよく見受けられた。

こうした小学校の意向や前述した課題に対応するため、平成 28 年度に 4 年生を対象とした「教職インターンシップ」を試行した（加藤・松原・高橋・内田・瀧澤、2017）。主として自らの得意教科等に関する学習指導面で確かな実践的指導力の基礎を身に付けることを目的とした取り組みである。前述の学校ボランティアと大きく異なるところは、

- ① 「教職インターンシップ」を通して達成したい目標と実践したいことを明確にした。
- ② ①の目標と実践したいことについて、校長・指導教員・学生・大学教員の 4 者で協議し、活動計画を作成した。
- ③ 活動日の中に振り返りの時間を位置づけ、学生は指導教員から指導を受けた。
- ④ 「教職インターンシップ」活動中、大学教員が受け入れ校を訪問し、学校と学生の意見を聴取し調整を図った。
- ⑤ 「教職インターンシップ」に参加している学生に対し、中間・最終と 2 回にわたり大学での報告会を実施し、活動の振り返りや学びの共有をさせた。

以上 5 点である。この「教職インターンシップ」の取り組みで、目標の達成度では、参加したすべての学生から肯定的評価を得た。

6.3 小学校・教育委員会・大学間連携の立場から見た学校インターンシップのニーズやメリット

(1) 小学校から見たニーズやメリット

学校インターンシップは教職を目指す学生に成長をもたらす。では、逆に学生を受け入れる小学校側のメリットはどのようなものか、小学校管理職に実施「学校ボランティア活動実施状況」(2017年 埼玉県内小学校 20校 40人の管理職に実施)調査から報告する。

① 学校運営への影響

学校インターンシップに対して教職員からは主に次のような回答が得られた。

- 人手の足りないとき支援してもらえて助かる (95%)
- 授業中、個別に関わってもらえて助かる (95%)
- 子どもたちとよく遊んでくれる (85%)
- 学習活動時等の安全が図られる (85%)

各小学校では、保護者・地域・行政による支援を受け学校を運営している。しかし、児童一人一人を生かす教育活動の推進や多様化した児童への対応はそれでも厳しい状況にあり、学生による学校インターンシップは、小学校の教育活動を補完する意味でも意義深いと言える。

また、学校インターンシップを通じて学生に補助を希望する活動は、次のように挙げられた。

- 子どもたちと一緒に遊ぶ (90%)
- 学習の個別支援 (85%)
- 体験活動・実習時の補助 (安全確保を含む) (80%)
- 行事等運営のサポート (50%)
- 教室の環境整備 (35%)

これらの補助は教職員の職務軽減からも有効であるが、教育公務員として厳しく遵守する事項も含まれることから小学校・教育委員会・大学間での共通認識が必要である。

以上に加え、教員にとって必須の能力である「子どもや教職員とのコミュニケーション能力」を醸成する場としても学校インターンシップが有効であると認識されており、学校インターンシップを教員の資質・能力向上の貴重な場として認識していることが明らかとなった。

① 教員の成長の機会

管理職の目から見た結果では、学校インターンシップで学生が学ぶことが、「学校に活気が出て来た」(30%)、「中堅教員(ミドルリーダー)の人材育成にも役立っている。」(25%)という結果が出ている。(「学校ボランティア活動実施調査」2017参照)また、「若手人材育成に活用できる」と前向きに捉え、学校運営に活用しようとする管理職が見られた。

この結果の数値を見る限り、教員の成長に寄与しているかは限定的であるが、管理職が

学校経営にどの様に位置付けるかにより、教員の育成に役立つことが期待される。この事は、次に記す、校長職時代に多くの学生を学校に受け入れて学生を育てるとともに、現職教員育成に活用した校長経験者 U へのインタビュー結果からも明らかである。

- ※インタビュー対象：男性、教職経験 37 年、校長経験 年、退職 2 年目、62 歳
- 教員は、学校インターンシップの学生と関わることで成長します。
- 教員が学生に観られることは、まさに自分を磨くことにつながるのです。
- 学生が教室に入り込んだ場合の授業は、熱気を帯びているのをよくみかけました。教員も児童もいつも以上に「よい」自分を演出しようとするからです。管理職が直接手を下さなくとも、大学生が教室に入り込むだけで授業が変わるのです。
- 一斉指導での学生の出番は、学習規律の支援に限られます。しかし、学生が授業補助として入ることで、一単位時間の学習過程に児童が主体的に活動できる課題解決型、問題解決型の授業が増えてきます。児童が、課題解決に向け主体的に活動しているときに個別の支援が必要となります。その際、教員が学生に指示したり、指導したりするようになると、教員自身の資質が向上しリーダー性が芽生えてきます。

以上のように学校インターンシップを学校経営戦略に機能的に位置付けることが、様々な世代の現職教員育成に効果的に作用すると言える。

だが、学校インターンシップで学生が小学校で学修することに負担感を感じる教員も少なくない。校長経験者 U のように、学校インターンシップを戦略的に導入し、教職員がそのことを認識した学校では、教員の負担感は薄いと言える。つまり、学校にとっては、学校経営戦略への位置づけこそが、学校インターンシップの良き効果発揮の鍵と言える。また、そのことを指導的立場の教育委員会が推進していくことも求められる。

(2) 教育委員会から見たニーズやメリット

教育委員会は、国・県等から配当される教職員の他に、各自治体・各学校の実情に応じて、市町村費の非常勤職員を配置している。目的は、学習支援・生活支援等様々だが、学校現場にとって無くてはならない存在になっている。しかし、各市町村の財政状況による格差がみられるほか、必要に見合う増員が図れない現状となっている。そのような現状で、教育委員会から見たニーズやメリットを知るため、三芳町教育委員会にインタビュー調査を行った。その結果以下のような声が聞かれた。

- 学校インターンシップで学ぶ学生は、児童の個別支援等、学校現場への人的支援として役立っている。
- 教育委員会主催事業(例:「芋ほり祭り」)等を実施する際の人材支援の上で役立っている。
- 夏季休業中の教育委員会主催事業である「サマーチャレンジスクール」(夏休み中の補充学習)での学生支援は、児童の学力向上に役立っている。
- 学生が学校インターンシップを通して、学校で必要なコミュニケーション力を養っておくことは、初任者の配置に当たり即戦力として期待でき、質の高い教職員の配置は教育

委員会にとっても大きなメリットである。

○学校現場を体験した上で進路選択ができているため、意志の強い、意欲に満ちた学生を現場に配置することが期待できる。

○若手教職員の増加から学校のみドルリーダーの育成が求められており、教育委員会としても重要な課題と認識している。学校インターンシップを通して、若手・中堅教員が学生と関わり、その指導を通して自身の研修を積み、力量を上げることは、教員や組織との調整を図るみドルリーダーとしての素地が養われることが期待できる。

以上のように、教育委員会としても、学校インターンシップはもちろん、小学校外での地域行事や補充指導等でも、学生に大きな期待を寄せていることが理解できる。また、学校インターンシップを通じた教員の成長も、組織力向上のために必要なものと認識されている。

(3) 大学から見たニーズやメリット

次の調査は平成 29 年の 9 月に実施した「学校インターンシップに関するアンケート」(教育学部 31 人が回答)である。この調査から、学生が学校インターンシップに求めるもの、また学校インターンシップから得たものを整理する。

Q1 「あなたがインターンシップをとおして学びたかったことはどんなことですか。」

「学びたかったことを学ぶことができましたか。」(表 8)

表 8 学校インターンシップを通して、学びたかったこと・実行できたこと

項 目	学びたかったこと		学んだ・実行できたもの	
	人	%	人	%
ア 学校の子どもたちと関わりたかった	29人	93.5%	28人	96.6%
イ 子どもたちの発達段階の差を知りたかった	11人	35.5%	11人	100%
ウ 先生たちと関わりたかった	24人	77.4%	20人	83.3%
エ 先生の仕事を知りたかった	21人	67.7%	15人	71.4%
オ 授業の仕方を学びたかった	28人	90.3%	20人	71.4%
カ 授業の工夫を学びたかった	22人	71.0%	15人	68.2%
キ 学級経営の在り方を学びたかった	23人	74.2%	10人	43.5%
ク 場面指導の在り方を学びたかった	25人	80.6%	14人	56.0%
ケ 学校の現状を知りたかった	17人	54.8%	13人	76.5%
コ 個に応じた指導の在り方を学びたかった	14人	45.2%	8人	57.1%
サ 自分の将来を考えたかった	8人	25.8%	8人	100%
シ 大学で学んだことの実践がしたかった	12人	38.7%	6人	50.0%
ス 自分の課題()を解決するため	5人	16.1%	2人	40.0%
セ その他()	1人	3.2%	1人	100%

「学びたかった」ことで回答数値が高く目に付くには、「ア 子どもたちとの関わり方」で、インターンシップでも1名を除き「実行できた」と回答している。また、「ウ 先生たちとの関わり方」を望んだ学生の80%以上が、そのことを「実行できた」と回答していることから、学校現場で大切にされる「子どもや同僚とのコミュニケーション」を学んだことがうかがえる。

「イ 発達段階の差を知る」「サ 自分の将来を考える」は、事前の期待値は低いですが、希望した全員が「学び、実行できた」と答えている。また、期待していた割に学びの数値が低いのが、授業のことや指導方法に関する事項の「オ 授業の仕方」「カ 授業の工夫」「キ 学級経営のあり方」「ク 場面指導のあり方」「コ 個に応じた指導」である。これらの事から言えるのは、大学で事前指導等をする際に、ややもすると「インターンシップで学ぶべきこと」を固定的に捉えて指導する危険がある。インターンシップで「学ぶべきこと」と学生が「学びたいこと」のニーズの捉え方が課題と言える。

Q2 「インターンシップを始める前の自分と比較して、向上したと思われるのはどんなこと」(表9)

向上したと思われるもので一番高い数値を示したのが「チ 挨拶、言葉遣い、服装など、基本的マナー」である。これは、「インターンシップの推進に当たっての基本的考え方」(文部科学省・厚生労働省・経済産業省、2014)でインターンシップの意義として示されている「社会人としての能力」、いわゆる「社会人基礎力」と言える。また、次の「ツ 上司や同僚(との関係)」も同じく「社会人基礎力」である。これらの事項は、学校インターンシップの事前指導の授業で厳しく指導している事項であるが、「学校」という教員の仕事の間が学生の学びの間として効果を発揮すると言える。

また、「セ 学習状況を把握して、個に応じた指導」や「ソ 発達段階を考慮して積極的に声をかける」は、学校現場でなくては学べない事項であり、その事に学生も新たに気付き、自身の成長したこととして回答していることがうかがえる。

最後の「テ 自らを省みて、自己の課題を認識」は、限られた体験を経験し、実践的指導力へと昇華させる際に最も重要なメタ的認知能力である。6割の回答しか無いことから、学校インターンシップの事前指導の際には「自己の課題発見」について、指導の工夫が必要と言える。

表9 学校インターンシップを通して向上したこと

(自己評価)指標→ 向上したと思われるもの	人	%
ア 小学校教師を目指す者としての誇りと責任をもち、子どもたちや保護者、社会が寄せる信頼と期待を具体的に理解している。	11人	35.5%
イ 学校における教育活動の様々な場面において、基本的な法令を元にして行動することの重要性を理解している。	6人	19.4%
ウ 保護者や地域(学校応援団など)との連携・協力の重要性を理解している。	14人	45.2%
エ 子どもの理解に必要な心理・発達の基礎知識を習得している。	13人	41.9%
オ 学級集団づくりのために必要な基礎理論・知識を習得している。	9人	29.0%
カ カウンセリングマインドや教育相談の手法をもとに、子ども一人ひとりの特性や状況に応じた理解ができる基礎的技能を身に付けることができた。	5人	16.1%
キ 小学校学習指導要領や教科書の内容に係る基礎理論・知識を習得している。	3人	9.7%
ク ICT(情報通信技術)の活用に係る基礎理論・知識を習得している。	4人	12.9%
ケ 特別支援教育に係る基礎理論・知識を習得している。	6人	19.4%
コ 子どもの発達段階や実態、状況に応じた学級経営案を作成する方法を理解している	2人	6.5%
サ 教材研究を生かした授業を構想し、子どもの反応を想定した学習指導案としてまとめることができる。	6人	19.4%
シ 発問、話し方、板書など、授業を行う上での基本的な指導技術を身に付けている。	11人	35.5%
ス 授業力向上のためのPDCAサイクルを理解し、自己の授業実践を改善する方法を身に付けている。	0	0
セ 子ども一人一人の学習状況を把握し、個に応じた指導をすることができる。	16人	51.6%
ソ 子どもたちの発達段階を考慮して、積極的に声をかけたり、相談に乗ったりするなど、親しみをもった態度で接することができる。	20人	64.5%
タ 上司や同僚に、適切に報告・連絡・相談をしたり、保護者や地域住民からの相談に対処したりできる能力を身に付けている。	7人	22.6%
チ 挨拶、言葉遣い、服装、他の人への接し方など、社会人として求められる基本的なマナーを身に付けている。	24人	77.4%
ツ 上司や同僚、他の職員の意見やアドバイスに耳を傾け、積極的に学ぼうとしている。	20人	64.5%
テ 自らを省みて、自己の課題を認識し、その解決に向けて、謙虚な姿勢で学び続ける姿勢を持っている。	19人	61.3%

以上の二つの問いから、学校現場と大学の「往還的な学び」に視点を当てると、学生は大学の授業で教科指導について学び、その事をさらに深く学びたいとの願いを持っている。しかし、教職の専門的知識や技能分野については、学生のほとんどが「向上した」という回答をしていない。この事からは、「往還的な学び」の内容が学生の望む学びと学校が認識している指導内容にズレがあると言える。

教職の専門的内容や技術を現場で学びたいという学生の望みと、小学校側の「児童や教職員との人間関係づくり」という意識差が見て取れる。もちろん、教職の高いレベルの専門的知識や技能は、学生が乗り越えるべきハードルが高い。意欲的に学びたい、教職の専

門的知識や技能を身に付けたいという学生の意識に応える方策の基盤となるのは、学校・教育委員会・大学間の情報提供と情報の共有化をもととした「学生の学びに関する共通認識」であると言える。

協力をいただいた学校(連携市町20校)

川越市・・・新宿小学校、高階北小学校、高階西小学校、古谷小学校

所沢市・・・清進小学校、安松小学校、明峰小学校、和田小学校

富士見市・・・勝瀬小学校、水谷小学校、関沢小学校、みずほ台小学校、針ヶ谷小学校
ふじみ野小学校

三芳町・・・三芳小学校、唐沢小学校、藤久保小学校、竹間沢小学校

朝霞市・・・朝霞第四小学校、朝霞第七小学校

(4) 今後の小学校・教育委員会・大学間連携の在り方

これまで述べてきた現状から、学校インターンシップにとって重要なのは学校・教育委員会・大学間の情報の共有化であることが明らかとなった。また、個々の組織には次のような対応が求められる。まず、学校インターンシップ受け入れ校、特に校長は、学校インターンシップを学校経営戦略に位置付け、教職員もまたその趣旨を理解の上受け入れることが求められる。次に、教育委員会はこれを指導的立場で指導、支援していくことが求められる。さらに、大学はこのことを理解した上で、学生一人一人に実践的指導力を身に付けさせるため、学校インターンシップ関係のカリキュラムや、教育活動を創りあげ充実させていくことが求められる。また、大学は、学校インターンシップに学生を送り出す立場として、活動の目的や内容や評価を明らかにし、学校インターンシップの効果を論理的に説明する責務も負う。

以上のことから、今後の学校・教育委員会・大学間連携では、学校インターンシップの情報提供、情報共有、並びに共通認識を図っていくことが重要である。このために大学は、学生の取り組みを支援するとともに、教育委員会や受け入れ校の声に耳を傾けねばならない。この積み重ねこそ、「学校インターンシップ」を支える環境を整備することにつながるのである。

6.4 小学校・教育委員会・大学間の情報提供、情報共有化のあり方

(1) 情報提供・情報提供の考え方

学校インターンシップでは、一人一人の学生が自身の課題を明確にし、目的をもって取り組み、学ぶ必要がある。その際、一人一人の学生に実践的指導力を身に付けるため、大学は、学校インターンシップを通して学生自身の課題や目的を実現できる可能性の高い教育現場に、学生を送り出すことが求められる。しかしながら、大学内において学生自身の課題や目的を把握し、学生を小学校に送り出そうとする際、しばしば次のようなことが問題となる。

- ① 学校インターンシップに関して大学が求める活動内容を小学校・教育委員会が理解していない。
- ② 学校インターンシップに関して小学校・教育委員会が求める活動内容を大学が理解していない。
- ③ 個々の学生の実態に応じた学びを、大学側と学校側が共有できていない。

実践的指導力を身に付けていく過程では、学生が自身の課題を知り、その課題を解決して自身の力量を高めるための効果的な学校インターンシップや教育ボランティアへの取り組みが必要となる。しかしながら、そうしたことを、学校が求める活動とは限らないことから、学生のニーズと小学校・教育委員会・大学のニーズを、小学校・教育委員会・大学の三者が互いに理解する相互の情報提供と情報の共有化が必要である。

この為に、ホームページやメール等を効果的に活用して対応したい。以下に今後の情報提供と情報共有のあり方について取り組み案を述べる。

(2) 小学校・教育委員会が求める活動内容を大学が理解する

これまで、小学校・教育委員会のニーズの詳細を大学側が理解するために、提携する4市1町91校の代表である各教育委員会と情報交換会議を行ってきた。しかしながら、これは、小学校にとって教育委員会という媒体を通じた各市町の総体的情報であり、91校個々の情報ではない。また、教育委員会にとっても限られた時間内での話し合いであって、他教育委員会の連携内容の理解や小学校・教育委員会・大学のニーズを詳細に把握する情報交換とまではなっていない現状がある。各市町の教育委員会や校長会に教員・保育士養成支援センターが説明に行く機会も設けてはいるが、限られた時間に大学側からの一方的説明となっており、学校・教育委員会のニーズを十分に掌握する機会とはなっていない。必要なのは、各小学校・教育委員会の詳細なニーズを知り、学生に適切な学校インターンシップでの学びができる場を充て、小学校・教育委員会・大学の三者にメリットが生まれる活動を構築することである。

このためには年度当初、活動の場である小学校に対して、どのような学校インターンシップの受け入れが可能か、学校インターンシップ活動内容に何を期待しているのか、学校

インターンシップ活動にどんな学生を期待しているのか等について調査を行う必要がある。別紙がその調査内容である。この調査内容を基に、毎年学校インターンシップ活動の為にデータベースを作成する。また、学校側からは、教育学部ホームページ上のフォームメールから、必要な申し出や、学生の活動に対する意見を送付してもらう。

小学校は日頃よりホームページに関心を持って閲覧し、学校インターンシップや教育ボランティアの内容を理解するようにする。その上で、小学校のニーズ（児童の実態や校内研究等）に応じてホームページ内のフォームメールから学生受け入れ希望メールや、活動への意見や希望を教員・保育士養成支援センターに発信する。教員・保育士養成支援センターでは、事前の「学校インターンシップ・教育ボランティア調査」から学生を選択して学校に紹介する。また、学生には、S-Navi やゼミの時間、教員・保育士養成支援センター掲示板、チラシ等を活用して、小学校のニーズを知らせ、当該学校のニーズを理解し学ぶことを希望する学生を学校に紹介する。

学生には、毎回の履修指導時に「学校インターンシップ・教育ボランティア調査」を実施し、学生ニーズ情報を一覧にして教員・保育士養成支援センターで掌握する。この一覧から学生ニーズを考慮して学校ニーズとマッチングさせ、学校インターンシップや教育ボランティアに取り組ませる。

また、学生が講義等から興味を持ち、学び、研究したい教科等がはっきりした場合は、大学側より、メーリングリストにて学生を学校に紹介するメールを発信する。

(3) 大学が求める活動内容を学校が理解する

学生には、毎回の履修指導時に「学校インターンシップ・教育ボランティア調査」を実施し、学生ニーズ情報を一覧にして教員・保育士養成支援センターで掌握する。この一覧から学生ニーズを考慮して小学校・教育委員会ニーズとマッチングさせ、学校インターンシップや教育ボランティアに取り組ませる。また、学生が講義等から興味を持ち、学び、研究したい教科等がはっきりした場合は、大学側より、学生を学校・教育委員会に紹介する機能を整える。

学校インターンシップⅠ・学校インターンシップⅡのように、学ぶべき内容が明確になっているものについては、年度当初の校長会等でその概要を説明すると共に、内容をHP上に掲載し、学校・教育委員会側に詳細な情報を提供し、学校側が活動内容を理解の上、手を挙げやすい環境を整える。教育委員会も学校管理者としてその活動を掌握することとなる。

学校インターンシップⅢのように、学校が自身の課題を明確にして目的を持ってボランティアに臨む場合には、メールを効果的に活用し、教育委員会にはもちろん学校側に大学及び学生の意向が直接届くようにする。

(4) 情報提供・情報共有化システムの構築

大学・学校及び教育委員会の情報提供・情報取得には図のようなシステムを整える。下記の図 22 を使って、前述の①と②の内容を詳しく説明する。

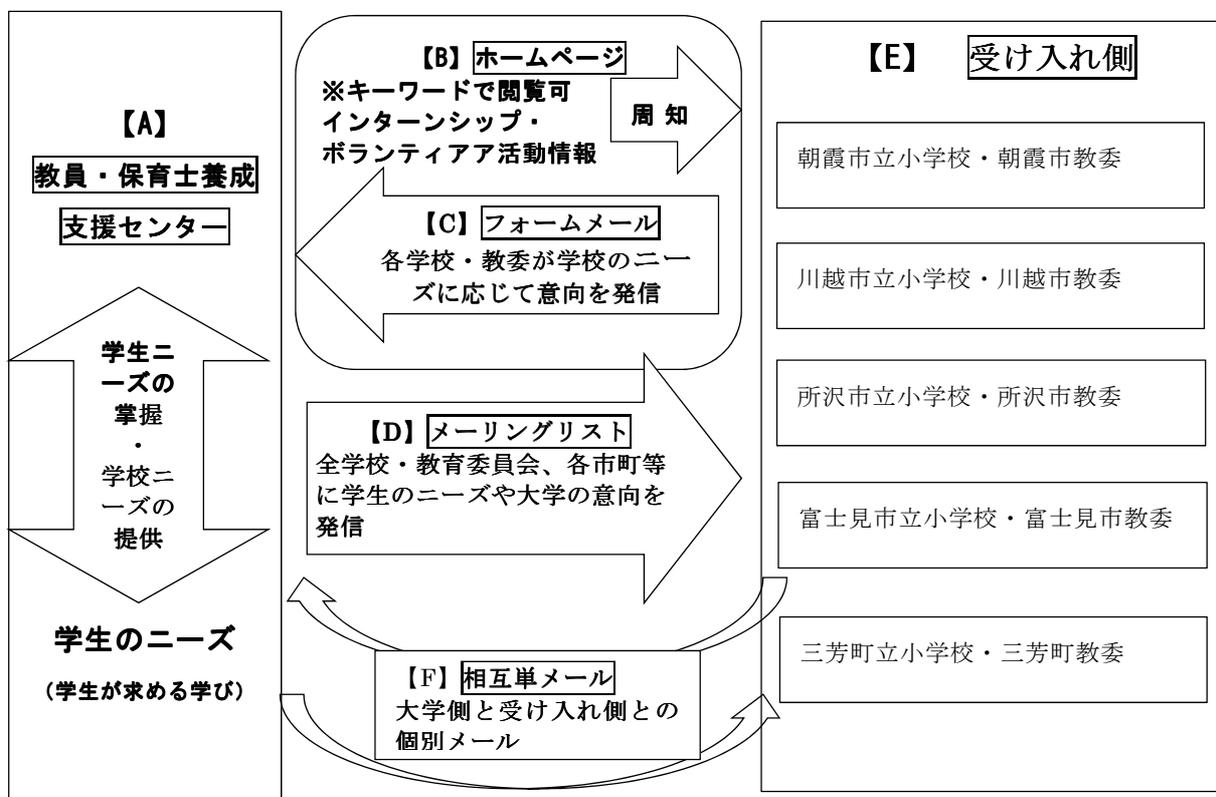


図 22 学校インターンシップに関する情報提供・情報取得の為のシステム

フォームメール

学校インターンシップに関する要望やお問い合わせフォームメール

○本フォームメールは、淑徳大学教育学部と連携する市町教育委員会・学校が要望や問い合わせをするメールです。

○以下の項目を入力して、「確認」を押してください。

お名前 必須	<input style="width: 90%;" type="text"/>
メールアドレス 必須	入力例:foo@example.com <input style="width: 90%;" type="text"/>
	確認のためもう一度入力してください <input style="width: 90%;" type="text"/>
お問い合わせ内容 必須	<input style="width: 90%; height: 40px;" type="text"/>

> 確認

【図 22 の各機能】

【A】「教員・保育士養成支援センター」について

教員・保育士養成支援センターが、アンケートや個人面談で学生の意向を掌握する。また、学校からの情報を学生に提供し、学生が求める活動を紹介する。

【B】「ホームページ」について

大学ホームページ上に、大学のインターンシップ活動情報を掲載し、学校や教員委員会がインターンシップに関する詳細な情報をいつでも閲覧できるようにする。例えば、インターンシップⅠ～Ⅲの目標や狙い、学生の活動内容、学校にお願いしたい留意事項、ボランティア学生受け入れを申込み手順、等を掲載する。ホームページは、「実践的指導力」に効果のある実習形態を学校に理解していただくため、各インターンシップの目的や内容、教育ボランティアの目的や内容等を周知する役目を担う。その為に、ホームページ上で学校インターンシップや教育ボランティアの目標、内容、具体的な例などを写真や動画等で詳しく説明するページを設ける。

但し、本ホームページは大学・教育委員会・学校だけが閲覧できるよう、セキュリティーの為に、閲覧する際にはキーワードを設けるようにする。

【C】「フォームメール」について

ホームページ上に「フォームメール」を設け、教育委員会・学校が大学に意向を送り易いようにする。例えば、「道徳研究発表会に際し、道徳を学びながら、道徳研究の補助や道徳研究発表会当日の手伝いをする学生を募集」等を学校がフォームメールで大学に送り、これを受けて教員・保育士養成支援センターでは、必要としている学生に情報を提供する。

【D】「メーリングリスト」

教育委員会の年2回の打ち合わせ会、及び校長会での説明会を補うため、必要な時に一斉メールを送るシステムである。例えばインターンシップの活動状態を周知したり、学校に同時に知ってもらいたい情報を提供するシステムである。例えば、「3名の学生が卒業論文で道徳の授業について研究を希望。そのためのインターンシップを受け入れて下さる学校・教諭を募集」等である。

【E】「受け入れ側」

受け入れ側は、ホームページでインターンシップ活動内容を理解するとともに、「フォームメール」でニーズに応じた意向を発信する。また、メーリングリストで送られてくる学生のニーズや大学の意向に応える。

【F】「相互単メール」

大学側と受け入れ側の個々の学校や教育委員会との、必要に応じた情報交換や相談の為にメールであり、学生に関する情報を交換し合う。例えば、受け入れ側である学校が学生に直接指導しにくい内容を相談するなどである。

(5) 今後の課題

前述のシステムを教育委員会・学校と共有して活用するため、教育委員会のネット・メールに対する方針を知るため話し合いを持った。そこでは次のような課題が明らかとなった。

①ネットの安全性を確保するために、メーリングリストを作ることが困難。

②システム上、フォームメールからメールを送ることが困難。

アンケート作成して現在調査中である。

情報共有化連絡システムについて（アンケート調査）

淑徳大学 教員・保育士養成支援センター

◆回答に☑をお願いします。

1 _____ 教育委員会

2 ご回答者様 所属部署_____

職名_____ 御氏名_____

3 大学ホームページ上に、パスワードで開く大学・教育委員会・学校が閲覧できるページを作成し、情報の共有化を図る場合、教育委員会や学校は

閲覧できる 閲覧できない その他（ _____ ）

※閲覧できない理由（ _____ ）

4 上記のホームページ上に連絡用「フォームメール」を作った場合、教育委員会や学校が大学に問い合わせや意向を伝えることが

可能である 不可能である その他（ _____ ）

※不可能な理由 _____)

5 大学から一斉メールで情報を提供する場合、教育委員会・学校にご協力いただいて「メーリングリスト」を作成することは

可能である 不可能である その他（ _____ ）

※不可能な理由 _____)

6 情報共有化の方法について、ご意見がありましたらお聞かせください。

おわりに

本調査研究では、有意義な学校現場での体験を、大学で学ぶ理論と融合させて質の高い実践的指導力にまで高めていくために学校インターンシップを教職課程に位置づけていくことが目的である。特に、理論と実践の往還を目指した学校インターンシップの実施内容のあり方、既存の教育実習との役割分担のあり方、学生に対する事前・事後指導のあり方、教育委員会との連携のあり方、学生側と受け入れ校側との Win-Win の関係構築のあり方、情報提供のあり方について調査研究を行ってきた結果、以下の点が整理できた。

(1) 学校インターンシップを受け入れる小学校等の理解を得るために

教育委員会やその管理下にある小学校の校長等に長期間の学校インターンシップの目的を理解してもらい、本学部と教育連携の協定を結べるように努力した。具体的には、学校インターンシップは、学生と大学だけにメリットがあるものではない。教職員の数が限られている小学校において、児童の活動時の安全確保や授業中の児童への個別対応等に学生が関わることで、小学校の教育効果を高めることが期待できることの理解を得るようにした。また、学生が小学校現場や教員の職務をよく知り、理論と実践の往還による実践的指導力の育成の基礎を培い、これからの教員に求められる資質・能力を理解し、学生自身の教員としての的確性を把握するための機会となっていることの理解を図るようにした。

(2) 学生に対する受入れ校の指導や評価への負担軽減の工夫

まず、評価については、小学校に事前に A4 判 1 枚の評価用ルーブリックを配付し、それを使って実習中の学生の評価の負担軽減を図った。次に、実習中の指導については、基本的に大学側が責任をもって指導を行うようにした。具体的には、附属施設として教員・保育士養成支援センターを設置し、小学校で実践経験の豊富な退職校長 5 名のスタッフで近隣の市町の教育委員会（三芳町、富士見市、所沢市、川越市、朝霞市）管理下の小学校との連絡調整役や学生の実習中の指導など、学生の実習のサポートを行った。

(3) 事前・事後指導、実習中の指導の工夫

学生に学校インターンシップを通して、何を学びたいのかを明確にさせ、実習体験を理論と関連付けて振り返る「省察」の指導の工夫をしてきた。特に、ベテラン教員が児童に指導する際の背景にある実践知を獲得できるよう指導してきた。具体的には、学生に将来自分自身はどのような教師になりたいかを念頭に置かせ、自分をメタ的な視点で見る習慣を身に付けるために、「活動中に考えたこと」「学んだことが将来どのように役立つのか」を振り返らせるメタ認知的スキルの習得をめざした学校インターンシップ活動記録を考案し、活用している。

(4) 学校インターンシップの実施時期の工夫

実習先の小学校と大学への通学時間や小学校現場での実習を考えると、1 年次や 2 年次の学校インターンシップの実施時期は、講義時期と重ならない後期授業がすべて終了した

春休みの 2 月に学校インターンシップを位置づけた。また、3 年次の学校インターンシップの実施時期は、通年で行うため、大学講義に影響を与えないように時間割配置を工夫し、週 1 回、小学校へ出向いて実習をすることを可能にした。

(5) 1 年次の学校インターンシップを実施するための工夫

実習時期を 1 年次後期授業終了後の 2 月に位置づけた。そして、事前指導では、教員になるという自覚の欠如、実習態度、社会人としての基本的なマナー不足など、時と場所、場合に応じた方法・態度・服装等の使い分けなどの TPO に関する指導を徹底したり、教育委員会の指導主事から現在の小学校の現状についての講話を聞かせたりした。また、実習に行くためには、指導主事や小学校の校長の面接で合格点を得ることを履修上の必要条件とした。

学校インターンシップ・教育ボランティア調査

1 学生情報

学部等	教育学部	年	初等教育コース	男・女
学籍番号		氏名	フリガナ	
ゼミ名	ゼミ		保険の加入	済 ・ 未

2 ①②の当てはまる回答に○印を

①学校でのボランティアを している・していない

②学校でのボランティアを今後 希望する・しないつもりである

3 学校でのボランティア先情報（やっている、または、する予定がある）

※学校が分かっている場合、主として行っている小学校を記入してください。

ボランティア先		電話	
ボランティア期間	平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日		
活動頻度・曜日・時間帯	例)「週1回火曜日午前」		
活動内容	川越特別支援の場合は○⇒（ ） ア) 学習指導（各教科等の授業）の補助 イ) 特別な支援を必要とする児童への指導の補助 ウ) 教育相談等の補助 エ) 実験や体験学習等の補助 オ) その他（ ）		
教育実習の希望	あり・なし	希望時期	月ごろ
謝礼の有無	あり・なし・交通費のみ・その他（ ）		

4 学校インターンシップを今後 希望する場合

インターンシップ先		電話	
インターンシップ期間	平成 年 月 日 ~ 平成 年 月 日		
活動頻度・曜日・時間帯	例)「週1回、火曜日、午前」		
希望する活動内容	ア) 学習指導（各教科等の授業）の補助 イ) 特別な支援を必要とする児童への指導の補助 ウ) 教育相談等の補助 エ) 実験や体験学習等の補助 オ) その他（ ）		
教育実習の希望	あり・なし	希望時期	月ごろ

学校ボランティア先の把握について

1 現状

学校ボランティア先の把握が正確になされていない現状があります。これは、学生が大学に報告するシステムと大学側が学校ボランティア先を更新するシステムが整っていないことが原因です。

この事に対しては、別紙のような申し出手順と一覧表を作成するシステムを整えたはずでしたが、うまく機能していません。教員・保育士養成支援センターで学生の状況を把握しても、それが一覧に反映されていないのが現状です。また、実態調査をしても学生が学校ボランティア先を変更すれば、すぐに古い資料となってしまいます。

しかしながら、教員・保育士養成支援センターの特任教員の先生方は、学生の学校ボランティア先情報を良く把握している現状もあります。そこで、教員・保育士養成支援センターの特任教員の先生方が学校ボランティア先の窓口となり対応します。

2 対応策

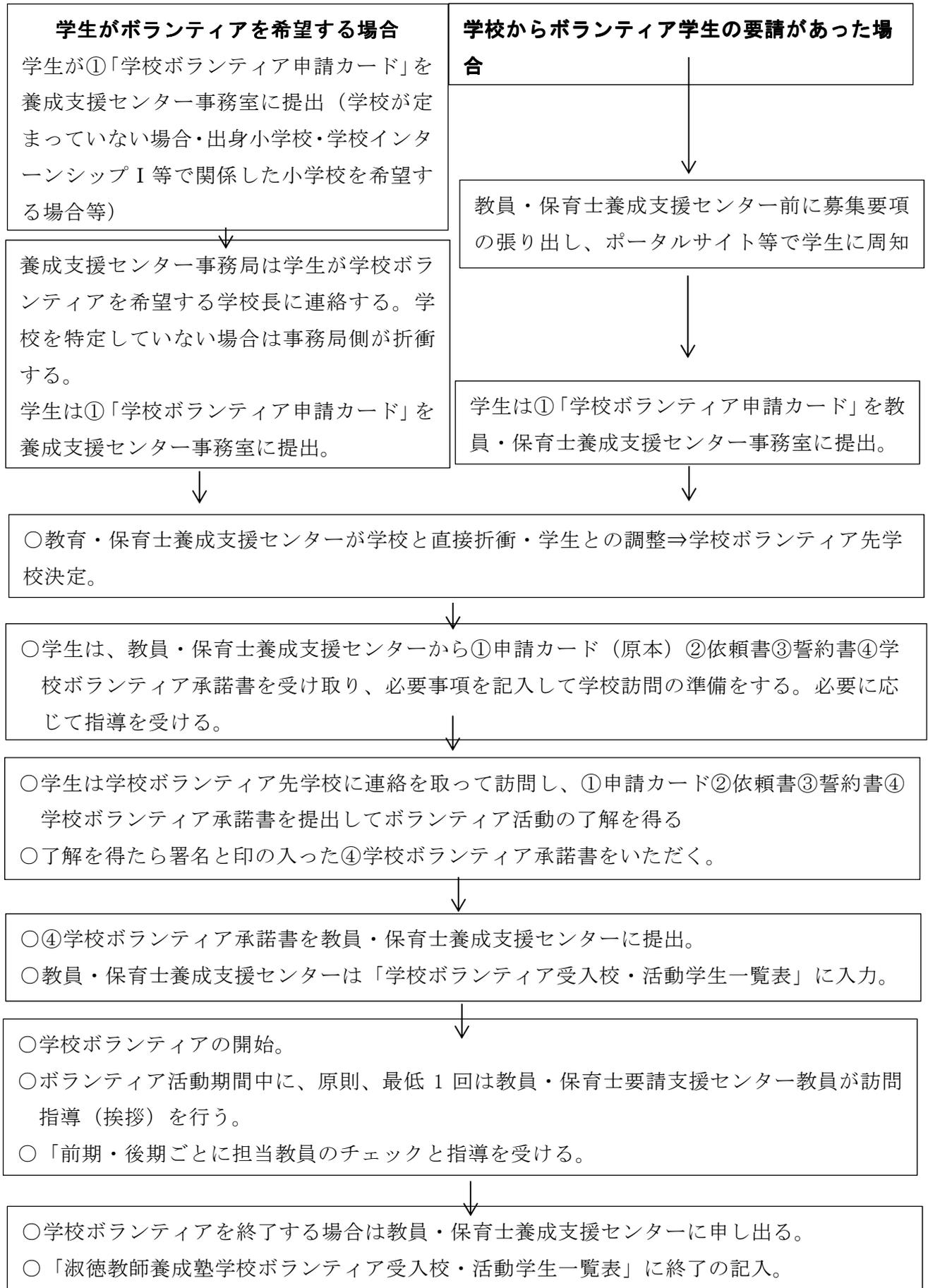
4月と9月に学校ボランティアを行っている学生を対象に事前指導を行う。また、8月と3月に事後指導を行う。

- (1) 学校ボランティア担当の専任教員は定期的に学生のボランティア先調査を行う。
- (2) 学校ボランティア希望学生は、教員・保育士養成支援センターの希望する市町担当の特任教員に相談の上、学校ボランティア校を決める。
- (3) 学生の学校ボランティア校が決定した場合は、当該市町担当の特任教員が学校ボランティア先一覧表の更新を行う。
- (4) 学生が学校ボランティア校を変更する場合は、当該市町担当の特任教員と相談の上変更し、当該市町担当の特任教員が学校ボランティア先一覧表の更新を行う。
- (5) 学校ボランティア中のトラブルや相談は、当該市町担当の特任教員が中心となり、担当専任教員と相談の上対処する。
- (6) 当該市町担当の特任教員と専任教員は、基本的に前期と後期に1回、学生の学校ボランティア校を訪問し、指導するとともに、現状を把握するようにする。
- (7) 以上の業務を、特任教員と担当専任教員が相談の上対応し、学校ボランティア先一覧表が常に最新の状況を保持する。

3 その他

○学校ボランティア実習記録、及び実習指導計画を決定する。

学校ボランティアの手順



学校ボランティアで身に付く実践的指導力に関する一考察

高橋敏 加藤尚裕 松原健司 岡野雅一 矢島健三 瀧澤重博 内田弘

要 約

本研究では、教職を目指す学生が小学校での学校ボランティアを通して、どのような実践的指導力を身に付けられるたのか、その実践的指導力は教師となった際にどのように役立っているのかを検討した。

研究対象は、本学を平成29年3月に卒業し教員となった2名の学生である。2名の学生が4年間の大学生活で行った学校ボランティアについて、卒業から4カ月経った時期にインタビューを行い、その発言を検討したものである。

発言内容をプロトコル化し検討した結果、学校ボランティアを通して確実に身に付け、現在担任する学級の児童の指導に効果を発揮している実践的指導力は、「子ども理解力」と「子どもとのコミュニケーション力」であることが明らかになった。

なお、本学ではフィールドスタディーをはじめとした学校現場実習や学校ボランティア、従来の教育実習等を総称して「学校インターンシップ」と呼んでいる。

キーワード 教員の資質能力 実践的指導力 学校ボランティア 学校インターンシップ
往還型の学び

< 関連論文 2 >

淑徳大学教育学部研究年報 実践報告、2017.9

4年次における「教職インターンシップ」カリキュラムの試行

加藤尚裕・松原健司・高橋敏・内田弘・瀧澤重博

要 約

平成 28 年度は、試行的に教職インターンシップを実施した。そのためにインターシップに参加した学生は 9 名と少なかった。しかし、実施してみて作成した教職インターシップカリキュラムは、アンケート調査や学生の学びから概ねよいことがわかった。

一方、問題点として、日々の学生が整理した教職インターンシップ活動記録に対する指導不足や、自らの目標を設定できるようにアドバイスしたり、学生がポジティブな学習を行えるように支援したりすることが十分にできていなかった。

今後は、指導教員が児童を指導している背景にある論理的に整理された知識に関する内容について、直接学生が指導を受ける機会を設けるなど、校長を中心に学生が安心して教員に声をかけられる環境を整えてもらったり、学生の悩みを個人的に聞く場を設けてもらったりするなど、事前・実習中・事後指導の在り方を検討し、その指導の仕組みづくりを行っていく必要がある。

キーワード 学校インターンシップ 教員養成 実践的指導力 小学校

< 関連論文 3 >

淑徳大学教育学部研究年報 研究ノート、2017.9

4 年次の教職インターンシップにおける省察に関する一試み

加藤尚裕・松原健司・高橋敏・内田弘・瀧澤重博

要 約

本研究では、学校インターンシップの中でも4年次の教職インターンシップに焦点を当て、質の高い実践的指導力を学生自らが培っていくための省察のあり方について、平成28年度に実施したインターンシップを事例として検討を行った。

学生の事例を通じた教職インターンシップの分析の結果、小学校現場での経験からの省察では、日々の教師の授業を個々で振り返る活動を行い、授業観察からの省察で得られた成果を、今後の小学校現場での実践に生かせるような実践的指導へと整理している。そのことから、学生自身が小学校現場の実践の場で得た知識が実践知として獲得されていくことが明らかになった。

キーワード 学校インターンシップ 教員養成 実践的指導力 小学校

実践的指導力の育成を目指す学校ボランティア活動の取組と課題

加藤 尚裕・内田弘

要 約

本研究では、本学部が実践してきた「学校ボランティア」を中心に理論と実践の往還が十分に機能しているかどうかを見直し、カリキュラムを再構築した。

再構築したカリキュラムは、具体的経験から始まり、経験からの省察、実践的指導、そして、再び具体的経験、経験からの省察、実践的指導を繰り返す。この3つのプロセスは、螺旋状に学習を繰り返すサイクルである。また、具体的経験では、初期段階で、学校、児童、教員とふれ合う、教員の仕事を知らず、自分の将来を考えられる経験をする。中期段階で、授業の仕方、学級経営の在り方を学ぶ、個に応じた指導の在り方を学ぶ。最終段階で、地域差(学校・児童・教職員)への適応能力を高める(人間関係づくりを含む)、社会人(教員)として第1歩を踏み出すための希望と自信を持つような経験をする。これらの段階は螺旋状に学習を繰り返すサイクルである。そして、経験からの省察では、日々の学校現場での体験を個々で振り返る活動をする。さらに、経験からの省察で得られた振り返りの成果を、今後の学校現場での実践に生かせるような実践的な指導へと整理し、学生が学校現場の実践の場で、それを利用し経験することで、実践知が獲得されていくというカリキュラムである。

キーワード 学校ボランティア 学校ボランティア 教員養成 実践的指導力 小学校

平成 29 年度

教員の養成・採用・研修の一体的改革推進事業
— 新たな教育課題の必修化のための研究事業 —

報告書

平成 30 年 3 月発行

編集・発行

淑徳大学 教員・保育士養成支援センター

〒354-8510

埼玉県入間郡三芳町藤久保 1150-1

(淑徳大学 埼玉キャンパス)

電話 049(274)1511 (代表)

印 刷

株式会社 白鷗社



社会へつづくキャンパスがある。

淑徳大学